

上峰町文化財調査報告書第31集

西前牟田遺跡 I

平成19・20年度県道神埼北茂安線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

上峰町教育委員会



にし まえ む た
西前牟田遺跡 I

平成19・20年度県道神埼北茂安線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009年3月

上峰町教育委員会

序

從来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

町の中央を国道34号線が東西に横断し、ここから、福岡県久留米市へは県道が通るという恵まれた交通環境に位置している上峰町は、佐賀市や鳥栖市、久留米市へも10km前後の最適な通勤圏にあるところから、近年人口も着実に伸び、ベッドタウンとして発展してまいりました。これに伴い、道路の整備も急務となり、町内の県道についても新規道路の開設、既存県道の拡幅、交差点改良、歩道整備などの事業が佐賀県県土づくり本部により毎年実施されております。

この報告書は、佐賀県県土づくり本部による県道整備事業の一環として平成19・20年度実施されました三養基郡上峰町大字前牟田地区内の県道神崎北茂安線道路拡幅工事に伴い実施した西前牟田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。今回の発掘調査は、県道の拡幅部分という限られた範囲の調査ではありましたが、弥生時代から中世に及ぶ遺構や遺物が出土しました。とくに中世の遺構、遺物については、当時営まれていた中世米多城の周辺地区における初めての埋蔵文化財発掘調査となり、当時のこの地域の動向を考える上で貴重な資料を得ることができました。この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました佐賀県教育委員会、佐賀県県土づくり本部、鳥栖土木事務所をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

上峰町教育委員会

教育長 八 谷 日出夫

例　　言

- 本書は、平成19年度及び20年度の一般県道神埼北茂安線地方道路交付金工事に伴い、上峰町教育委員会が佐賀県県土づくり本部の委託事業として発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字前牟田字北島及び字四割八坂に所在する西前牟田遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書は、平成20年度佐賀県県土づくり本部所管事業による埋蔵文化財発掘調査事業として、佐賀県土本部の委託事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。
- 発掘調査は、平成19年度及び20年度の県道神埼北茂安線改良工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、便宜的に調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。
- 調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成19年度	西前牟田遺跡	1区	500 m ²	平成19年5月21日
				3
平成20年度	西前牟田遺跡	2区	300 m ²	平成20年4月11日
				3 平成20年5月17日

- 現場での遺構実測作業は、調査員および調査員の指示により製図作業員が行った。
- 遺構などの現場における写真撮影及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。
- 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
- 本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
- 本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
- 本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物及び現場で作成した図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

- 西前牟田遺跡の略号は、「NMT」であり、調査区略号は、1区（平成19年度調査）を「NMT-1」とし、2区（平成20年度調査）を「NMT-2」とした。
- 遺構番号は、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの2桁の番号を組み合わせて表記した。
SH……堅穴式住居址　SB……掘立柱建物址　SK……土壤　SD……溝跡・溝状遺構
S±……性格 SX……性格不明遺構・その他
例) SH101 1区の1号堅穴式住居址　SK-205 2区の5号土壤
- 本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。
- 表中の数値に付した記号について、()は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。
- 土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
- 遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。
- ここ数年来の市町村合併により、上峰町周辺の町村も合併が進み町村名が変更になっているが、本書では、一部を除き、旧來の名称を使用している。

調査組織

平成 19 年度

調査事務局 総括 八谷 日出夫 上峰町教育委員会 教育長
事務主任 大隈 忠義〃 文化課長
経費執行 原田 大介〃 文化課副課長
調査組織 調査員 池田 公一 日本考古学协会会员
原田 大介 上峰町教育委員会 文化課副課長
調査指導 佐賀県教育委員会

平成 20 年度

調査事務局 総括 八谷 日出夫 上峰町教育委員会 教育長
事務主任 大隈 忠義〃 文化課長(～平成 20 年 6 月 30 日)
原田 大介〃 文化課長(平成 20 年 7 月 1 日～)
経費執行 原田 大介〃 文化課副課長・課長
調査組織 調査員 池田 公一 日本考古学协会会员
原田 大介 上峰町教育委員会 文化課副課長・課長
調査指導 佐賀県教育委員会

発掘作業参加者

平成 19 年度

今村次男、江頭幸江、江島福満、鎌田光代、上林榮二、桑原 健、鳴山美千代、杉谷 勇、中山三千夫、
平野末久、深堀照美、山本タツミ、吉岡正道(発掘作業員)
島美保子、田尻祐子(製図作業員)

平成 20 年度

井上貴美子、今村次男、梅田美佐子、江頭幸江、江島福満、上林榮二、鎌田光代、桑原 健、鳴山美千代、
杉谷 勇、田中静雄、時津昌昭、中山三千夫、濱 富助、平野末久、深堀照美、松永チサ子、宮地晴美、矢
動丸松美、山田富士夫、山本タツミ、吉岡正道(発掘作業員)
江崎愛子、島美保子(製図作業員)

整理作業参加者

江崎愛子、島美保子、田尻祐子(製図作業員)

目 次

序	
例言・凡例	
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者	
I. 遺跡の位置と環境	1
1. 西前半田遺跡の位置	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査に至る経過	6
1. 調査に至る経緯	6
III. 平成 19 年度 1 区の調査	8
1. 遺跡の概要	8
2. 調査区と調査の概要	8
3. 調査の経過	11
4. 遺構	12
(1)掘立柱建物址	12
(2)井戸跡・土塁	14
(3)溝跡	17
5. 遺物	19
IV. 平成 20 年度 2 区の調査	27
1. 調査区と調査の概要	27
2. 調査の経過	27
3. 遺構	28
(1)堅穴式住居址	28
(2)掘立柱建物址	30
(3)井戸跡・土塁	31
4. 遺物	36
V. まとめ	43

挿図目次

Fig. 1 西前牟田遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)	2
2 西前牟田遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)	6
3 西前牟田遺跡 1・2 区 遷構配置図 (1/200)	9・10
4 1 区掘立柱建物址実測図 (1) SB-108・SB-111 (1/80)	12
5 1 区掘立柱建物址実測図 (2) SB-112 (1/80)	13
6 1 区井戸跡・土壤実測図 (1) SE-101・SK-102・SE-103・SE-107・SK-109・SE-110 (1/60)	15
7 1 区土壤実測図 (2) SK-113～SK-118・SK-120・SK-121 (1/60)	16
8 1 区溝跡実測図 SD-104・SD-106 (1/80)	17
9 1 区出土遺物実測図 (1) (1/4)	21
10 1 区出土遺物実測図 (2) (1/4)	22
11 1 区出土遺物実測図 (3) (1/4)	23
12 1 区出土遺物実測図 (4) (1/4)	24
13 1 区出土遺物実測図 (5) (1/4)	25
14 1 区出土遺物実測図 (6) (1/4)	26
15 2 区堅穴式住居址実測図 SH-203・SH-213・SH-219・SH-221 (1/80)	29
16 2 区掘立柱建物址実測図 SB-235～SB-238 (1/80)	31
17 2 区井戸跡・土壤実測図 (1) SE-201・SK-202・SK-204～SK-210・SE-211・SK-212 (1/60)	34
18 2 区井戸跡・土壤実測図 (2) SK-214・SK-215・SE-216・SK-217・SK-218・SK-220・SK-222～SK-224・SE-225 (1/60)	35
19 2 区井戸跡・土壤実測図 (3) SK-227・SK-228・SE-229・SK-230・SK-233 (1/60)	36
20 2 区出土遺物実測図 (1) (1/4)	39
21 2 区出土遺物実測図 (2) (1/4)	40
22 2 区出土遺物実測図 (3) (1/4)	41
23 2 区出土遺物実測図 (4) (1/4)	42

表目次

Tab. 1 西前牟田遺跡 1 区出土掘立柱建物址一覧表	14
2 西前牟田遺跡 1 区出土井戸跡・土壤一覧表	17
3 西前牟田遺跡 2 区出土堅穴式住居址一覧表	29
4 西前牟田遺跡 2 区出土掘立柱建物址一覧表	30
5 西前牟田遺跡 2 区出土井戸跡・土壤一覧表	32
6 西前牟田遺跡 2 区 SK-210 出土玉類一覧表	37
報告書抄録	

図版目次

- PL. 1 西前牟田遺跡 1 区全景
- 2 西前牟田遺跡 1 区
- 3 西前牟田遺跡 1 区遺構 (1)
- 4 西前牟田遺跡 1 区遺構 (2)
- 5 西前牟田遺跡 1 区遺構 (3)
- 6 西前牟田遺跡 1 区遺物 (1)
- 7 西前牟田遺跡 1 区遺物 (2)
- 8 西前牟田遺跡 1 区遺物 (3)
- 9 西前牟田遺跡 1 区遺物 (4)
- 10 西前牟田遺跡 1 区遺物 (5)
- 11 西前牟田遺跡 1 区遺物 (6)
- 12 西前牟田遺跡 1 区遺物 (7)
- 13 西前牟田遺跡 1 区遺物 (8)
- 14 西前牟田遺跡 1 区遺物 (9)
- 15 西前牟田遺跡 1 区遺物 (10)
- 16 西前牟田遺跡 1 区遺物 (11)
- 17 西前牟田遺跡 1 区遺物 (12)
- 18 西前牟田遺跡 1 区遺物 (13)
- 19 西前牟田遺跡 1 区遺物 (14)
- 20 西前牟田遺跡 2 区全景
- 21 西前牟田遺跡 2 区遺構 (1)
- 22 西前牟田遺跡 2 区遺構 (2)
- 23 西前牟田遺跡 2 区遺構 (3)
- 24 西前牟田遺跡 2 区遺物 (1)
- 25 西前牟田遺跡 2 区遺物 (2)
- 26 西前牟田遺跡 2 区遺物 (3)
- 27 西前牟田遺跡 2 区遺物 (4)
- 28 西前牟田遺跡 2 区遺物 (5)
- 29 西前牟田遺跡 2 区遺物 (6)
- 30 西前牟田遺跡 2 区遺物 (7)
- 31 西前牟田遺跡 2 区遺物 (8)

I. 遺跡の位置と環境

1. 西前牟田遺跡の位置 (Fig. 1)

西前牟田遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡みやき町（旧中原町・旧北茂安町）と、南部は同郡みやき町（旧三根町）と、西部は神埼郡吉野ヶ里町（旧東脊振村・旧三田川町）と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道 34 号線付近の旧三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

島栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背盤山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心にして遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った西前牟田遺跡が所在する町南部の大字前牟田地区は、筑後川水系の氾濫により形成された有明海へと続く沖積平野が地区の東部及び南部の大部分を占めている。一方、地区西北部の上米多、下米多、寺家一、西前牟田などの現集落は、吉野ヶ里町日達原付近から南に延びる日達原丘陵の最南端の低位段丘上に位置しており、古くから人々の生活の舞台となっている。

平成 19 年度及び 20 年度の県道神埼北茂安線の改良工事に伴い調査を実施した西前牟田遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字前牟田字北畠、四割八坂、紙園町付近に所在し、上峰町大字坊所都境地区から三上、西峰を経て大字前牟田米多地区で沖積平野に没する日達原丘陵南端の低位段丘上、標高 6m 付近に位置している。

2. 歴史的環境 (Fig. 1)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鏡の鉢型を出土した島栖市安永田遺跡¹⁾、約 400 基の甕棺墓が検出された中原町瓶方遺跡²⁾、埋納された 12 本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡³⁾、甕棺墓から船載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡⁴⁾、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東脊振の 2 町 1 村にまたがる吉野ヶ里遺跡⁵⁾など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約 12km、東西約 3km と南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心とする各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘で層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないの



上地町	12	湯谷本谷遺跡	24	坊所古墳群	中里町	47	西原水遺跡	神地町
1 真の魔古墳群	13	塙土墓群	25	櫻寺遺跡	36	山田農業試出土地	50	北茂安町
2 濱西山山城	14	八峰道跡	26	杉寺遺跡	37	山田古墳群	51	北浦谷南方後円墳
3 二本柳古墳群	15	二原山遺跡	27	坊所二本松道跡	38	大塚古墳	52	伊勢原前方後円墳
4 須西山山麓古墳群	16	五本谷遺跡	28	坊所三本松道跡	39	八幡社遺跡	53	馬鹿沼遺跡
5 堀三本松道跡	17	船石道跡	29	塔の原今林	40	施照遺跡	54	東伊豆村
6 風形古古墳群	18	船石所遺跡	30	西原水田遺跡	41	能方舟跡	55	御石動古墳群
7 谷底古墳群	19	切通遺跡	31	米糸城跡	42	能方舟力後圓墳	56	御石動古墳群
8 塙三本松道跡	20	一本谷道跡	32	前平坂城跡	43	能方所遺跡	57	根岸ヶ谷遺跡
9 青柳古墳群	21	坊所一本谷遺跡	33	加茂廣瀬落跡	44	ゾンドン落跡	58	三井東和遺跡
10 新立古墳群	22	上のびゅう古墳	34	江迎城跡	45	町南遺跡	59	吉石道跡
11 駒形原遺跡	23	日連原古墳群	35	一ノ倉原落跡	46	天神遺跡	60	幸上間寺跡

Fig. 1 西前牟田遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)

が現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である⁹。周辺地域では、神崎郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている¹⁰。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良・Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近、アカホヤ含有層のやや下部にて検出されている¹¹。

縄文時代になると、中原町香田遺跡¹²や東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹³などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、近年の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区¹⁴、平成2年度から5年度にわたり実施した八藤丘陵の調査¹⁵において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴國」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の前牟田地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅劍や貝釧を出土した切通遺跡¹⁶、神崎郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型鋤製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡¹⁷、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡¹⁸、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡¹⁹などが知られている。また、農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡¹⁷、船石南遺跡¹⁸、八藤遺跡¹⁹から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町蛭方原遺跡²⁰、上峰町五本谷遺跡²¹などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市劍塚古墳²²、中原町蛭方古墳²³、上峰町西南部から神崎郡三田川町にまたがる目達原古墳群²⁴、神崎郡神塙町伊勢塚古墳²⁵、佐賀市銚子塚古墳²⁶、佐賀郡大和町船塚古墳²⁷など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保・鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部・米多郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神崎郡三田川町東部の目達原一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えら

れる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稱荷塚などの前方後円墳6基ほか古稱荷塚など円墳數基からなる目達原古墳群³⁰⁾が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄劍、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1~3号墳³¹⁾が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の額西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷瀬、青柳、新立、奥の院、額西南山麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神崎郡三田川町下中村遺跡³²⁾、同郡東脊振村下石動遺跡³³⁾などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中村遺跡、東脊振村辛上庵寺跡³⁴⁾、靈仙寺跡³⁵⁾などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土星跡³⁶⁾や塔の冢寺跡³⁷⁾などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八幡丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土星跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設=「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土墨の東方に接する八幡丘陵の調査において、土墨東端から一直線に八幡丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され³⁸⁾、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の冢寺跡は、百济系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡³⁹⁾の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には聚落を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北西部の額西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた³⁸⁾。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡とともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している³⁹⁾。

以上、上峰町を中心と佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

- 藤原楨博・石橋新次『油比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集鳥栖市教育委員会 1980

- 2) 木下巧・天本洋一『源方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 4) 金闇丈夫・坪井清足・金闇惣一『佐賀県三津水田遺跡』『日本農耕文化的生成』日本考古学協会 1961
- 5) 七田忠昭他『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
- 6) 原田大介『八幡遺跡III』上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 7) 七田忠志『原始』『上峰村史』上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄『II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質』『佐賀平野の阿蘇4火砕流と堆積物』上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋『香田遺跡』『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志『佐賀県牧場ヶ谷遺跡』『史前学雑誌』6-2・4 1934
- 11) 原田大介『船石遺跡V』上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 原田大介『八幡遺跡II・墳土墓跡II』上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出(6)
- 13) 金闇丈夫・金闇惣一・原口正三『佐賀県切通遺跡』『日本農耕文化的生成』日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭他『二塚山遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第48集 佐賀県教育委員会 1979
- 15) 七田忠昭『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 16) 七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 鶴田浩二・原田大介『船石遺跡II 回釣編』上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介『船石南跡II 本文編』上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 原田大介『船石遺跡III』上峰町文化財調査報告書第8集 上峰町教育委員会 1990
- 原田大介『船石遺跡IV』上峰町文化財調査報告書第9集 上峰町教育委員会 1991
- 18) 原田大介『船石南遺跡I』上峰町文化財調査報告書第21集 上峰町教育委員会 2002
原田大介『船石南遺跡II』上峰町文化財調査報告書第22集 上峰町教育委員会 2002
- 19) 原田大介『八幡遺跡I』上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
- 20) 木下巧他『源方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 21) 木下巧・七田忠昭『五本谷遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 22) 石橋新次『劍塚前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
前出(2)
- 24) 松尾植作『日連原古墳群調査報告』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 佐賀県教育委員会 1950
- 25) 木下之治『古代国家の形成』『佐賀県史』佐賀県 1968
- 26) 木下之治編『鉢子塚』佐賀市教育委員会 1976
- 27) 松尾植作『佐賀県考古大綱』祐徳博物館 1959
前出(24)
- 29) 前出(16)
- 30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己『下中央遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 31) 高瀬哲郎他『下右石動遺跡』『下右石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 32) 松尾植作『東脊振村辛上魔寺跡の調査』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 佐賀県 1936
- 33) 田平徳栄他『雲仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 34) 高島忠平・桂一義『墳土墓跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 35) 松尾植作『塔の魔窟寺址』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯 佐賀県 1940
前出(12)
原田大介『八幡遺跡III』上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 38) 米倉二郎『中世』『上峰村史』上峰村 1979
- 39) 原田大介『坊所城跡』上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査の契機となった佐賀県県土づくり本部による県道神崎北茂安線の整備事業については、平成 8 年度より事業が開始され、毎年県土づくり本部より提出される事業計画に伴い埋蔵文化財の取り扱いについての協議、調整を行ってきた。今回の西前牟田遺跡 1 区を含む区域が、協議の席上にあがったのはであった。その席上、平成 19 年度事業として本町前半田地区の目達原丘陵を切り通して東西に横断する現県道の拡幅工事を主体とする道路改良工事計画が提示された。

事業の内容は、丘陵部を切通して東西に走る現県道の南側丘陵を切土し、道路幅員を南側へ約 10m 拡幅し車道の整備および歩道を新設するというもので、吉野ヶ里町との境界までの延長約 450m の工事対象区間で、すでに用地買収が終了した部分延長約 300m について、平成 19 年度事業として部分的に拡幅工事を実施するというものであった。

平成 18 年 11 月 27 日に用地買収が終了した区域を対象に埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果、工事対象地区のうち、現在宅地として開かれ現県道高まで削平されている部分では遺構、遺物は検出されなかつたものの、丘陵東側部分のこれまで畑として利用してきた区域では、丘陵の旧状を残し、畑の耕作面が現県道高より 1.5m～2m ほど高い位置にあり、すでに耕作土中には土師器・須恵器の小片、中世土器小片などが散見されており、この畑部分からは、中世のものと思われる土壙や溝跡、ピットなどが検出された。

確認調査の結果を受けて、県教育委員会、鳥栖土木事務所、町教育委員会の三者で検出された遺構の取り扱いについて、協議を行い、平成 19 年度事業として、遺構が検出された部分、延長約 70m、幅員約 8m の約 500 m² について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

その後、平成 19 年 12 月 18 日に開催された「平成 20 年度県土づくり本部所管事業と文化財の保護に係る調整会議」の席上、用地買収の進捗に伴い、平成 18 年度の調整会議の時点では未買収で確認調査が実施できなかつた区域について地権者との調整が完了し確認調査が可能となったとの報告があった。平成 19 年 12 月 28 日に前回平成 18 年度に確認調査を実施できなかつた丘陵西側部分の延長約 100m 部分を対象に確認調査を行うこととなつた。その結果、対象地区的西端の県道と町道米多西線交差点付近に畑として残る部分から中世のものと思われる土壙、ピットなどが検出され、この区域延長約 30m、幅員約 10m の約 300 m² について、西前牟田遺跡 2 区として、平成 20 年度に事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。



Fig.2 西前半田遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)

III. 平成 19 年度西前牟田遺跡 1 区の調査

1. 遺跡の概要 (Fig.1, 2)

西前牟田遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字前牟田字北畠、四割八坂、祇園町の標高 5m～6m 付近の洪積世低位段丘上（「米多丘陵」と呼称する。）に位置している。この洪積世丘陵は上峰町と三田川町にまたがって発達する目達原丘陵の一支丘で、遺跡の南部の下米多、寺家二集落付近で有明海へと続く沖積平野に没している。

目達原丘陵は、上峰町側では小さな谷を挟んで下津毛丘陵、坊所丘陵などの各支丘に別れているが、丘陵の中央部は戦中の陸軍飛行場建設に伴い大規模な造成工事が実施され、現在は平坦な土地となっている。この飛行場建設工事により、目達原古墳群を構成していた大塚古墳、古橋荷塚古墳、福荷塚古墳などの主要な古墳が消滅し、塔の塚廢寺跡の基壇が失われ、「肥前風土記」に記述されている「米多井」の正確な位置も不明となっている¹⁾。

この目達原丘陵の平坦部からさらに南へ延びる支丘上に西前牟田遺跡は立地している。町の南西部に位置し、現在上米多、寺家一集落が占有する米多丘陵には、西前牟田遺跡のほか上米多貝塚として弥生時代の貝塚が知られ、遺跡の北には北畠遺跡、南の丘陵が平野へと移行する部分には中世城館跡である米多城跡が位置している。

この米多丘陵の東部は、標高 4m～3m の冲積地で、東の下坊所付近から米多地区にかけて発達する段丘崖は筑後川の最大蛇行線と考えられている²⁾。

また、この丘陵の西を流れる小河川「西の川」を挟んだ三田川町下中村地区の目達原丘陵上には下中村遺跡群が広がっている。このように、多くの遺跡が位置する上米多地区をはじめ米多地区一帯は、「米多の原（目達原）」として古代以来この地域の中心と考えられてきたものの、今まで集落として発達し早くから宅地化が進んできたため、特に上峰町側ではこれまで本格的な埋蔵文化財発掘調査の例が無く、その実情は不明なままとなっている。

註

- 1) 松尾慎作 「塔の塚廢寺址」『佐賀県史稿名勝天然記念物調査報告』 第 7 帯 佐賀県 1940
- 2) 松尾慎作 「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史稿名勝天然記念物調査報告』 第 9 帯 佐賀県教育委員会 1950
- 2) 米倉二郎 「概説」『上峰村史』 上峰村 1979

2. 調査区と調査の概要 (Fig.2, 3・PL.1, 2)

西前牟田遺跡が立地する米多丘陵は東西幅 200m の南北に延びる丘陵であるが、この丘陵を切り通して現県道が東西に走っている。『佐賀県遺跡地図』では、この県道を境に北側が北畠遺跡、南側が西前牟田遺跡として登録されている。今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった西前牟田遺跡 1 区は、この丘陵の東端付近から西へ 70m 程の区域で、これまで畑として利用されており、標高 6m 強、現県道面までの比高は 1.5m～2m、東の沖積面までは約 2.5m を測る。

調査区内の土層は、地表面に畑の耕作土が 15cm～30cm の厚さで堆積しており、その直下は遺構検出面であるいわゆる地山が検出され、各時代の遺物包含層は長年の耕作によってすでに削平されている。

今回の調査区は、道路拡幅工事により削平される範囲を調査の対象としたため、延長約 70m、幅員約 7m の直線的な調査区となった。そのため、拡幅範囲の法線に沿って調査区の中央に一直線の東西ラインを設定し、このラインを基準として、南北列 2 列、東西列 8 列の 10m×10m グリッドを設定して調査を行った。

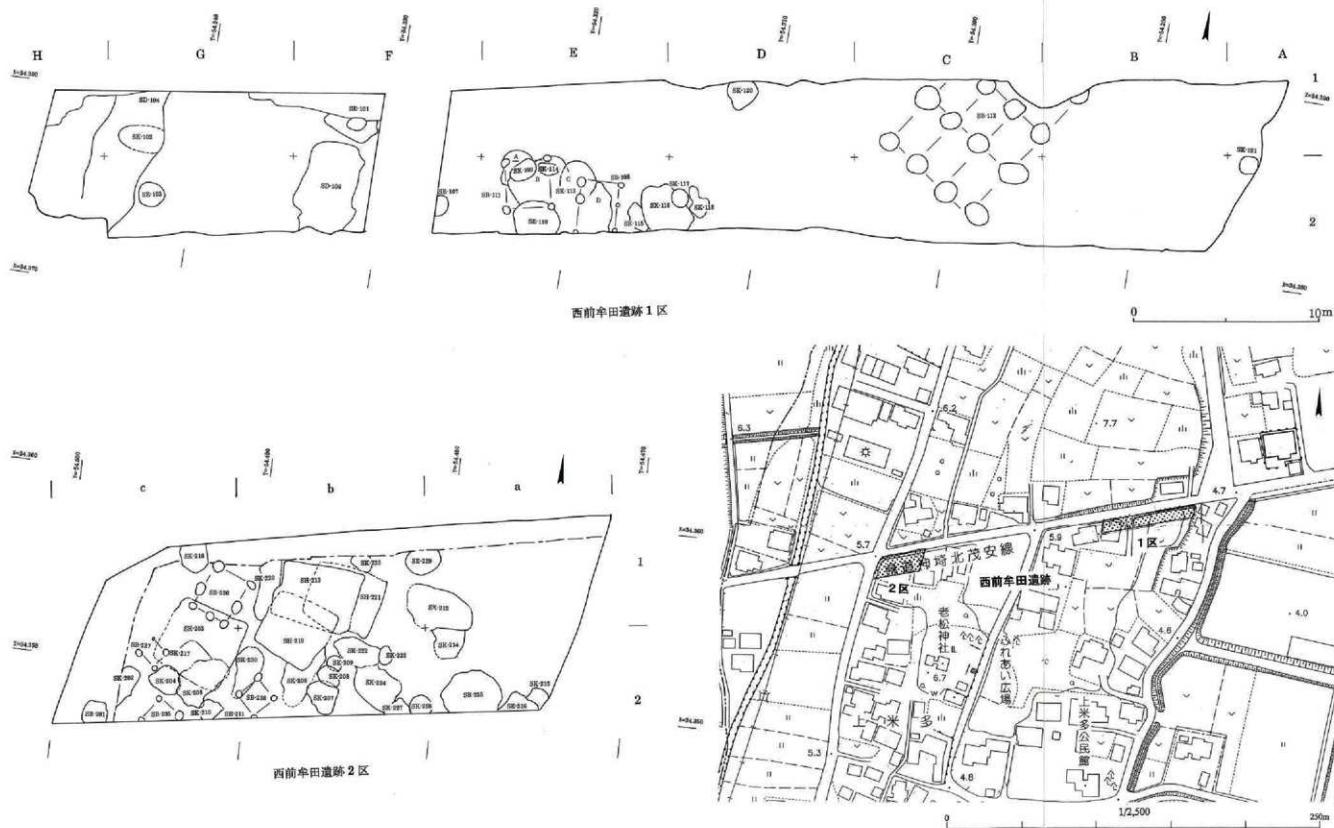


Fig.3 西前牟田遺跡1区・2区遺構配置図 (1/200)

今回の西前牟田遺跡1区の調査で検出された遺構は、奈良時代から中世の所産と考えられる掘立柱建物址3棟、井戸跡4基、溝跡2条、土壙13基、その他ピットなどであった。また、これらの遺構に伴い弥生式土器、土師器・須恵器、中世土器、船載陶磁器、その他石製品、鉄製品などが出土した。

3. 調査の経過

平成19年度の一般県道神埼北茂安線地方道路交付金工事に伴う発掘調査は、道路拡幅工事により削平が予定される現県道南側の丘陵部分について、延長約70m、幅員約7mの約500m²の部分を便宜的に西前牟田遺跡1区として実施した。現地での作業は、平成19年5月21日から7月27日まで行った。以下簡略に調査経過を記す。

- 平成19年5月21日 午後から調査範囲の網張りを行い、調査区内の除草、雑物の撤去などを行い、西前牟田遺跡1区の調査に着手した。
- 23日 調査対象地区の西側から重機により、遺構検出面までの表土掘削作業を開始した。表土掘削作業は3日間を要し、28日に終了。
- 28日 発掘作業員を招集、発掘器材類の搬入、休憩所設営後、調査区西側から遺構検出作業に着手。以後、検出された遺構は、逐次掘り下げ作業を行った。また、掘り下げが完了した遺構は必要に応じ写真撮影をあわせて行い、発掘作業を調査区の東側へと進めていった。
- 6月12日 グリッド設定、レベル移動など遺構実測作業の準備を行い、調査区西側より実測作業に着手。
- 6月中旬以降 このころより梅雨が本格化し、遺構を掘り下げては雨水をくみ上げるといった一進一退の作業状態が7月中旬まで続く。
- 7月上旬 雨の合間を縫いながらも遺構の掘り下げと実測作業、個別の遺構写真撮影を並行して進め、主要な遺構の掘り下げをほぼ終了した。7月5日には出土遺物の取り上げに着手し、調査完了状態の写真撮影に向かって調査区全体清掃作業を開始した。
- 19日 調査完了状態の調査区全体写真撮影。
- 23日 最後の遺構の掘り下げ終了。
- 24日 遺構実測作業終了。現場でのすべての作業を終え、発掘器材類の撤収を行い、米多文化財収蔵庫にて後片付けを行う。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、報告書刊行へ向けた整理作業を12月まで実施した。当初、平成19年度の調査成果は、年度内に報告書を刊行する予定であったが、平成19年12月18日に行われた「平成20年度県土づくり本部所管事業と文化財の保護に係る調整会議」で、同一工区内の用地買収の進捗に伴い、平成20年度に拡幅工事を実施したいとの申し出があり、20年度の工事対象区域について確認調査を実施することとなり、対象地区の一部の区域から中世の遺構が検出された。協議の結果、この遺構が検出された部分については平成20年度事業として発掘調査を実施することとなり、平成19年度の調査成果についてもいったん整理作業を中断し、平成20年度の調査成果とあわせて報告書を刊行することとなった。

4. 遺構 (Fig.3~8・PL.1~5)

平成19年度の西前半田遺跡1区の調査で検出された遺構は、前述のように、奈良時代および中世の所産と考えられる掘立柱建物址3棟、中世の所産と考えられる井戸跡4基、溝跡2条、土壙13基、その他ピットなどであった。また、これらの遺構に伴い弥生式土器、中世土器、船載陶磁器、その他石製品、鉄製品などが出土している。

(1) 掘立柱建物址 (Fig.4, 5・PL.3, 4・Tab.1)

前述のように今回の調査で掘立柱建物址は3棟が検出された。そのうちSB-108、SB-111は中世の土壙の検出面で柱穴の掘り方が確認されおり中世以降の建物。SB-112は一部の柱穴から図示はできなかったが奈良時代のものと思われる土師器・須恵器などの小片が出土している。

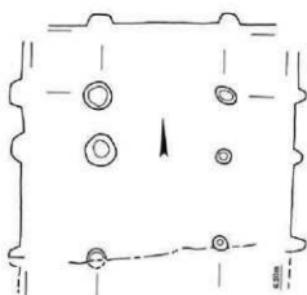
SB-108 (Fig.4)

SB-108は、E-2Grで建物の北側部分が一部検出された掘立柱建物址。2間×1間分の柱穴が検出されており建物自体は南部の調査区外へ延びるものと推定される。桁行の柱間は間隔を異にし、北から半間、一間の間隔で柱が設けられている。柱穴は直径25cm～50cm、深さ20cm程度の円形の掘り方。桁行の柱間は北側が0.8m、南側が1.8m。梁行の柱間は2.0m。規模は検出された部分で、桁行2.7m、梁行2.0m、床面積5.4m²を測る。主軸はN1°・Eである。SK-113の土壙群の上面で検出された。

SB-111 (Fig.4・PL.3)

SB-111は、E-2Grで検出された1間×1間の掘立柱建物址。柱穴は直径30cm～60cm、深さ20cm～30cm程度の不整な円形の掘り方。柱間はともに2.4m。規模は、2.4m×2.4m、床面積5.8m²を測る。南北方向を基準にすると主軸はN10°・Wである。SK-113の土壙群の上面で検出された。

SB-108



SB-111

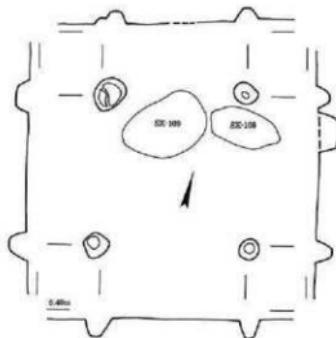


Fig.4 1区掘立柱建物址実測図 (1) SB-108・SB-111 (1/80)

SB-112

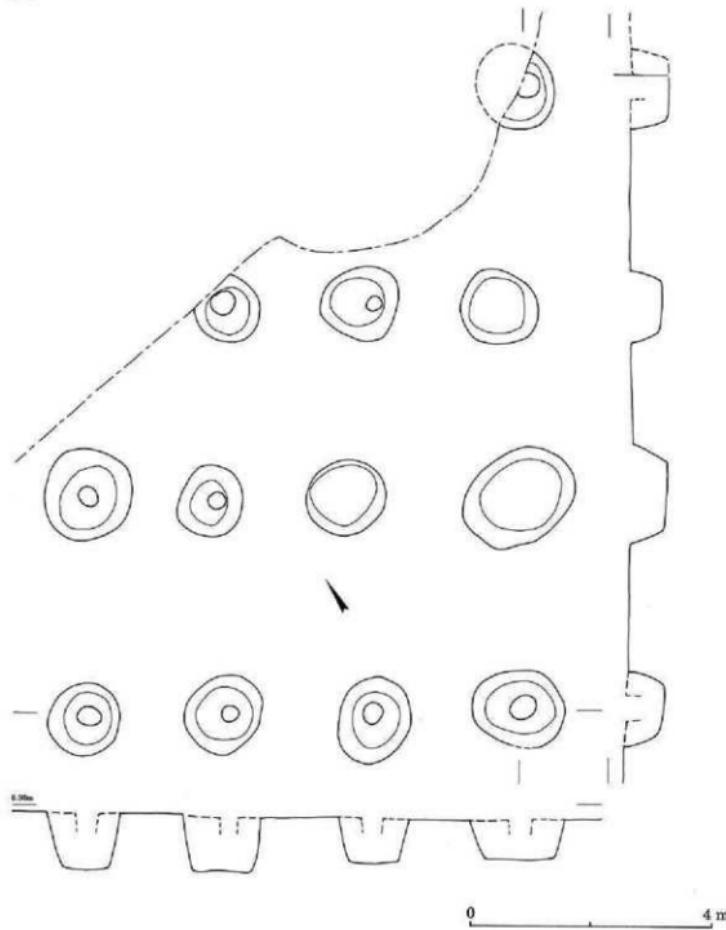


Fig.5 1区掘立柱建物址実測図(2) SB-112 (1/80)

SB-112 (Fig.5・PL.3, 4)

SB-112は、B-1Gr、C-1Grで検出された柱穴が検出された総柱の掘立柱建物址。4間×3間分の柱穴が検出されており建物自体は北東側の調査区外へ延びるものと推定される。柱穴は大きさに大小の幅があるものの、直径1.2m～1.4m程度、深さ60cm～80cm程度の円形の掘り方ものが多い。また個々の柱穴には直径20cm～40cm程度の柱痕跡をもつものも多い。桁行の柱間は4.3m、梁行の柱間は2.4m。規模は検出された部分で、桁行12.9m、梁行7.2m、床面積92.8m²を測る。主軸はN-33°・Eである。

Tab.1 西前半田遺跡1区出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模(m・m ²)				棟方向	備考
		桁行	梁行	長さ×幅	床面積		
SB-108	※2×1	0.8-1.8	2.0	※2.7×2.0	※5.4	N-1°・E	
SB-111	1×1	2.4	2.4	2.4×2.4	5.8	N-10°・W	
SB-112	※4×3	4.3	2.4	※12.9×7.2	※92.8	N-33°・E	

(2) 井戸跡・土壤 (Fig.6, 7・PL.4, 5・Tab.2)

西前半田遺跡1区の調査で検出された井戸跡および土壤と考えられる遺構は、井戸跡4基、土壤13基であった。井戸跡4基は中世、土壤は出土遺物が皆無で時期が特定できないものもあるが、大半は中世の所産と考えられる。

以下、井戸跡は個別に報告し、土壤については、形態、法量、主要な出土遺物などを一覧にまとめ報告とする。

SE-101 (Fig.6・PL.4, 5)

SE-101は、F-1Gr.調査区北側境界で検出された井戸跡。全体の2/3程度を調査した。掘り方の平面プランはやや東西に長い梢円形を呈すものと思われ、上部は漏斗状に開き、さらにその下部は長径1.0m、短径0.6mの梢円形の竖穴が深さ1.4mまで掘り込まれている。溜橋井戸で、このSE-101から溝跡SD-106が延びており、定量以上の水が溜まった際にSD-106を通して丘陵南部へと水を供給していたものと推測される。

SE-103 (Fig.6・PL.4, 5)

SE-103は、調査区西部のG-2Grで検出された井戸跡。掘り方の平面プランは直径1.4mほどの円形を呈し、深さは0.8m。溝跡SD-104の東側に隣接しているところから、この溝から給水を受けていた溜橋井戸と推測される。

SE-107 (Fig.6)

SE-107は、F-2Gr.調査区西側境界で検出された井戸跡。全体の1/2程度を調査した。掘り方の平面プランはやや不整な円形を呈すものと思われ、円筒状に約1.0mの深さまで掘られている。溜橋井戸。

SE-110 (Fig.6・PL.5)

SE-110は、E-2Gr.調査区南側境界で検出された井戸跡。全体の2/3程度を調査した。掘り方の平面プランは直

径 2.3m 程度のやや不整な円形を呈し、上面が一旦深さ 0.5m 程度掘り込まれ、さらに井戸本体の縦坑が先細りの円筒状に掘り下げられている。掘り抜き井戸と推測され、深さ 1.3m ほど掘り下げたが基底には達せず、安全面を考慮し掘り下げを中断した。この SE-110 からは大量の瓦器塊、土師器皿・小皿、土鍋、舶載陶磁器、などが出土している。

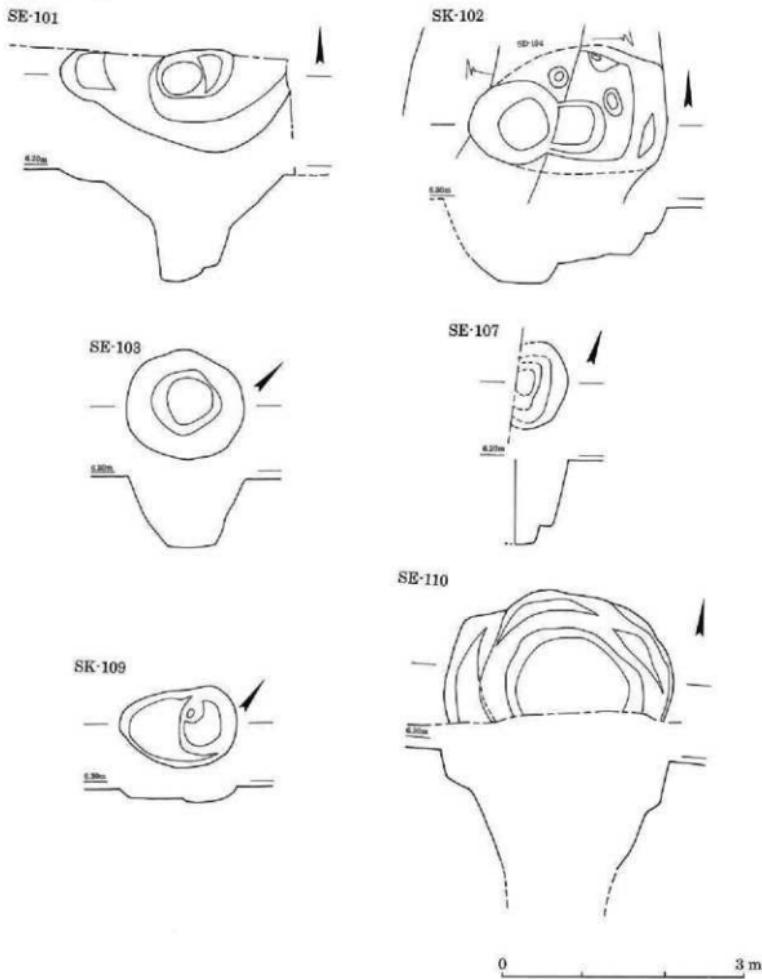


Fig.6 1区井戸跡・土壤実測図 (1) SE-101・SK-102・SE-103・SE-107・SK-109・SE-110 (1/60)

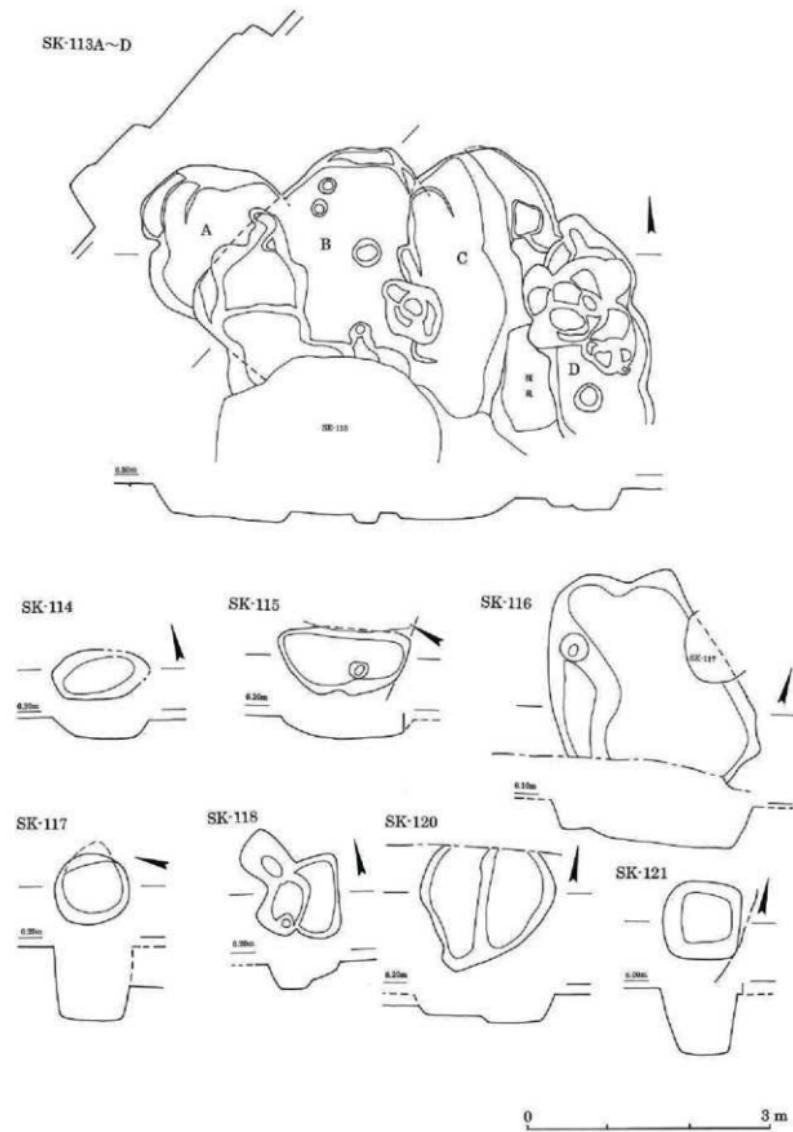


Fig. 7 1区土壤実測図 (2) SK-113~SK-118・SK-120・SK-121 (1/60)

Tab.2 西前牟田遺跡1区出土井戸跡・土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面、下段…底面 単位:m・m ²)				出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積		
SE-101	不整橢円形	※2.8 2.46 1.94	※1.2 (1.5) (1.3)	1.40	1.9		井戸跡
SK-102	不整形	1.44 0.66	1.34 0.54	0.80	0.3	土師器皿	井戸跡
SE-103	円形	1.08 0.30	※0.6 ※0.2	1.00	※0.3	土鍋・瓦器塊	井戸跡
SE-107	不整円形	1.46 1.22	0.94 0.78	0.13	0.7		
SK-109	不整形	2.32 1.40	※1.6 ※0.2	※1.3	※3.0	土師器皿・小皿・甕・土鍋・瓦器塊・青磁碗・小皿・白磁碗・石鍋・土製支脚・砾石	
SK-113A	不整形	※1.1 ※1.1	2.00 1.75	0.40	※2.1	土師器皿・小皿	
SK-113B	不整方形	3.20 2.84	※1.8 ※1.7	0.36	※6.5		
SK-113C	不整形	※3.3 ※3.3	1.90 1.70	0.32	※3.0		
SK-113D	不整形	※2.7 ※2.4	1.40 1.00	0.29	※2.2		
SK-114	不整形	1.22 0.90	0.62 0.40	0.21	0.3		
SK-115	不整形	1.22 0.90	0.84 0.60	0.20	0.7		
SK-116	不整形	※2.7 ※2.4	2.22 1.92	0.45	※4.0		
SK-117	円形	1.22 0.90	0.86 0.84	0.91	0.5	土師器小皿	
SK-118	不整形	1.22 0.90	0.90 0.76	0.22	0.6		
SK-120	不整円形	1.22 0.90	※1.5 ※1.3	0.32	※1.5		
SB-121	椭丸方形	1.22 0.90	0.96 0.60	0.77	0.3		

(3)溝跡 (Fig.8・PL.4, 5)

西前牟田遺跡1区の調査で検出された溝跡と考えられる遺構は、SD-104とSD-106の2条であった。いずれも中世の溝跡で、粘質土や砂層といった覆土の状況から本丘陵に生活する人々に用水を供給していたものと推測される。

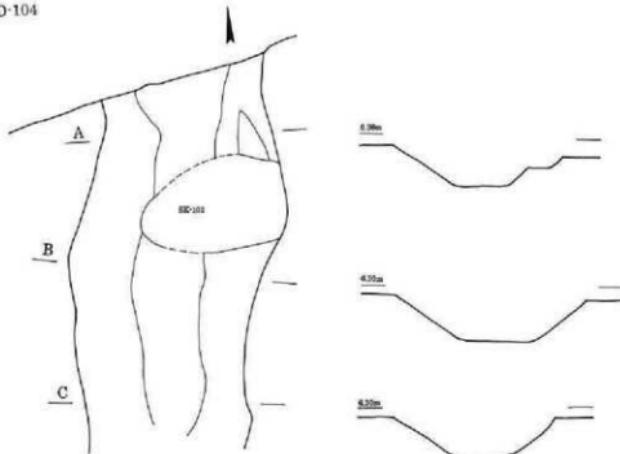
SD-104 (Fig.8・PL.4)

SD-104は調査区の西端部、G-1Gr・G-2Grで、調査区を南北に縱断する形で延長約6mが検出された。幅員は上面で2.6m~3.0m、底面で0.8m~1.4m。深さは調査区北端部で約0.5m、南端部で約0.7m。断面が逆台形を呈すやや底面が広いV字構。東に隣接する井戸跡SE-103へ水を供給していたものと推測される。

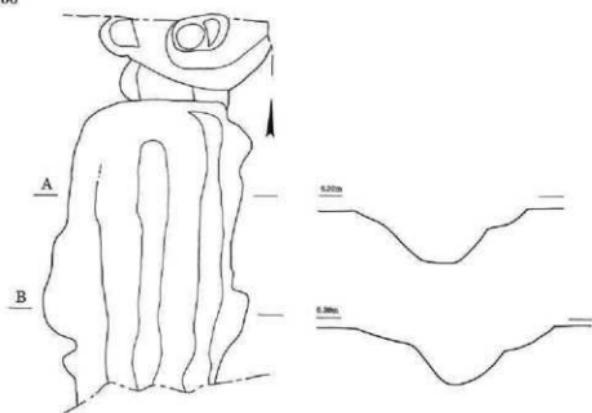
SD-106 (Fig.8・PL.4)

SD-106はF-2Grで検出された溝跡。井戸跡SE-101の南に隣接して端を発し調査区南部へ延びる溝跡で延長約5mが検出されている。幅員は上面で2.8m~3.3m、底面で0.3m~0.5m。深さは北端部で約0.9m、調査区南端部で約1.1m。断面は不整な逆三角形を呈す二段掘りのV字構。井戸跡SE-101との境界には、井戸からの水を通すための「野越し」的な掘り込みをもつ。

SD-104



SD-106



0 4 m

Fig. 8 1区溝跡実測図 SD-104-SD-106 (1/80)

5. 遺物 (Fig.9~14・PL.6~19)

平成19年度の西前半田遺跡1区の調査では、弥生式土器、奈良時代の土師器・須恵器、中世の土師器皿・小皿、瓦器塊、土鍋などの土器類、青磁碗・青磁皿・白磁碗などの舶載陶磁器類、土製品、石製品、鉄製品などが各遺構から出土した。一部を除いてほとんどが中世の所産になるもので、大量の遺物が一括して出土した井戸跡SE-110を除くと、各遺構からの遺物の出土量は決して多くはない。

ここでは、出土した遺物のうち図示できるものについて出土した遺構ごとに報告したい。

SE-103 出土遺物 (Fig.9・PL. 6)

1は中世の土師器皿。平底で体部は直線的に開き口縁にいたる。底部は回転糸切りの後ナデ。

SD-104 出土遺物 (Fig.9・PL.6, 7, 19)

2~6は土鍋。いずれも体部は外傾しながら開き口縁に至る。内面ハケ目、外面ナデ。2、6は素口縁。3~5は折り返しまたは貼り付け口縁。7は土師器皿、平底で体部は内湾し口縁に至る。体部外面はロクロ目を顕著に残し、底部は回転糸切り痕を残す。8は瓦質の鉢。口縁下部に沈線がめぐりさらに縦の沈線文が施文されている。9は土師器の小皿。円盤状の底部外周に外傾する短い口縁が立ち上がる。底部は回転糸切り痕を残す。10は素焼きの壺の口縁部。厚手の作りで直立する口縁の外側に断面三角形の突帯が付く。11は滑石製の石鍋の底部。外面に整状工具で削り出した際の調整痕が残る。外周に近い底部に二次穿孔をもつ。12は弥生式土器の丸底広口壺。球形に近い胴部に外反しながら開く短い口縁が付く。器面は内外面ともに荒れている。流れ込みの遺物と推測される。124は土製管玉。約半分が遺存している。遺存部で長さ3.5cm、最大径2.0cm、内径0.7cm。重さ11.5g。

SD-106 出土遺物 (Fig.10・PL.7, 8)

13~17は、土鍋。いずれも体部は外傾しながら開き口縁に至る。口縁は折り返しまたは貼り付け口縁をもつ。内面はハケ目、外面はナデ。

SE-107 出土遺物 (Fig.10・PL.8)

18は須恵質の土鍋。口縁内面がやや内湾する。内外面ともにナデ。口縁外面が暗灰色、他は灰色を呈す。19は瓦器塊。高台の開きはなく体部は内湾しながら開き口縁に至る。内面はナデ、外面横位の細かいミガキ。器面は暗灰色、胎土は灰色を呈す。

SE-110 出土遺物 (Fig.9~13・PL.8~19)

20、107は土鍋。20は体部が直線的に開き口縁は貼り付け。外面はナデ。107は体部がやや内湾しながら開き口縁は貼り付け。外面はナデ。21は土師器の壺の口縁部。短い口縁がやや外傾し開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。22~32は瓦器塊。高台はいずれも貼り付けで、29の高台がわずかに外反する以外は高台の開きも少なく短く小さい。体部は23~26、28、29のように内湾しながらそのまま口縁に至るものと、22、27、30~31のように体部中位で屈折し小さく外反しながら開くものがある。32の体部外面のミガキ調整を除き他は内外面ともにナデ。いずれも暗灰色ないし灰色を基調とした色調を呈す。法量はいずれも口径15cm~16cm程度、器高は5cm強を測る。33~36は舶載陶磁器。33は青磁碗。底部は分厚く「ハ」の字型に開く太く短い高台をもつ。体部は内湾

しながら開き口縁に至る。外面にはクロ口目を残し見込みを除く内面にはヘラ描き文、櫛目文が施文されている。同安窯系の製品。34、35は白磁碗。いずれも高台周りはシャープに削り出され、体部は直線的に開き、口縁端部は小さく外へつままれている。高台内側と高台周りは無釉で、34は見込みに蛇の目軸ハギを施す。36は青磁小皿。底部は小さくやや上げ底を呈し、体部は水平に広がり外傾する短い口縁が立ち上がる。見込みにヘラ描き文、櫛目文が施文されている。底面は無釉。37～80、85は土師器皿。個体によりやや異なるもののいずれも平底を基調とし、体部は外傾しながら開き口縁に至るが、37、40、41、46、49などのように体部が直線的に開くもの、38、39、42、43、48などのように体部が内湾しながら開くもの、44、45、47、51、56などのように体部が外反しながら開くものと形態的に多様である。底面は回転糸切りの後ナデを施したものが多いが、77のように回転糸切り痕を残すものも見える。76、78は底面に板状の圧痕が残る。85は、故意か偶然か不明であるが口縁の一部が大きく内側に折り曲げられている。これら土師器皿類はいずれも明黄褐色を基調とした色調を呈す。法量はいずれも口径 15cm～16cm 程度、底径 10cm～11cm 程度、器高は 3cm 前後を測る。79～84、86～105は土師器小皿。いずれも平底で円盤状の底部外周に外傾する小さく短い口縁をもつ。底面は回転糸切り後ナデならされているものが多いが 79～81 のように回転糸切り痕を残すものも見える。器厚、口縁の形状で個体差はあるが、法量はいずれも口径 9cm 程度、底径 7cm～8cm 程度、器高は 1cm 程度を測る。いずれも明黄褐色を基調とした色調を呈す。106も小皿。上記の土師器小皿と比較すると底径が 3.6cm と小さい。底面ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ。須恵質で暗灰色を呈す。器の歪みが激しい。108は滑石製の石鍋（羽釜？）。平底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は斜めに面取りされている。口縁下部に鈎状の羽がめぐる。体部外面には盤状工具で削り出した際の調整痕が残る。109、110は土製支脚。いずれも上部がやや細くなる不整な四角錐台形の粘土柱で断面は不整方形を呈し、基部を欠く。109は遺存部の中央部よりやや下の側邊の一部が四隅とも二次的に浅く抉られている。125は抉り入り石斧。基部から 12cm ほどが残る。断面は「U」字型を呈す。写真左側辺に抉りをもつ。高さ 3.3cm、厚さ 2.9cm、重さ 229.5g。砂岩？製。126は鉄製の釘。先端部 4.5cm が残る。127は砥石。砂岩質の扁平な自然石を用いほとんど加工もせずに両面が砥石として利用されている。長さ 11.1cm、幅 3.6cm、厚さ 2.8cm を測る。重量 198.1g。

SK-113 出土遺物 (Fig.14・PL.18)

111は土師器壺。底部は平底で体部は直線的に外傾しながら開き口縁が小さく外反する。112は土師器小皿。平底で体部は内湾しながら立ち上がり口縁はほぼ直立する。

SK-117 出土遺物 (Fig.14・PL.19)

113は土師器小皿。平底で円盤状の底部外周に外傾する小さく短い口縁をもつ。底面に板状の圧痕を残す。

SD-122 出土遺物 (Fig.14・PL.19)

114、115は土師器壺。114はやや上げ底で体部はやや内湾しながら開き口縁に至る。115は径が小さく分厚い平底の底部で体部はやや内湾しながら開き口縁に至る。116は素焼きの壺。肩部上位に突帯状の断面三角形の小さい隆線がめぐる。口縁部は外反しながらほぼ直立する。口縁外面に花菱状の陰花文が刻印されている。117は土師器羽釜、丸底の体部に水平に広がる羽がめぐる。118は陶質の鉗嘴。119～123は土鍋。120は素口縁、その他は折り返しまたは貼り付け口縁をもつ。121、123の内面にハケ目が見えるほかは内外面とともにナデ。

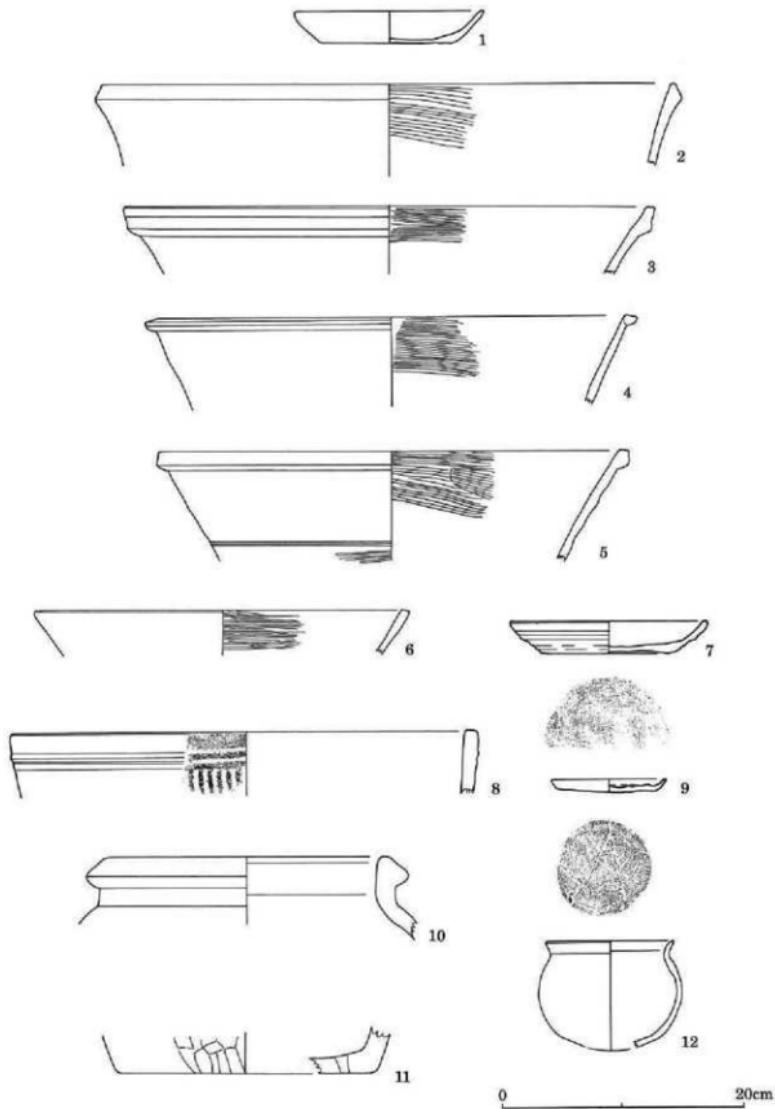


Fig.9 1区出土遺物実測図(1) (1/4)

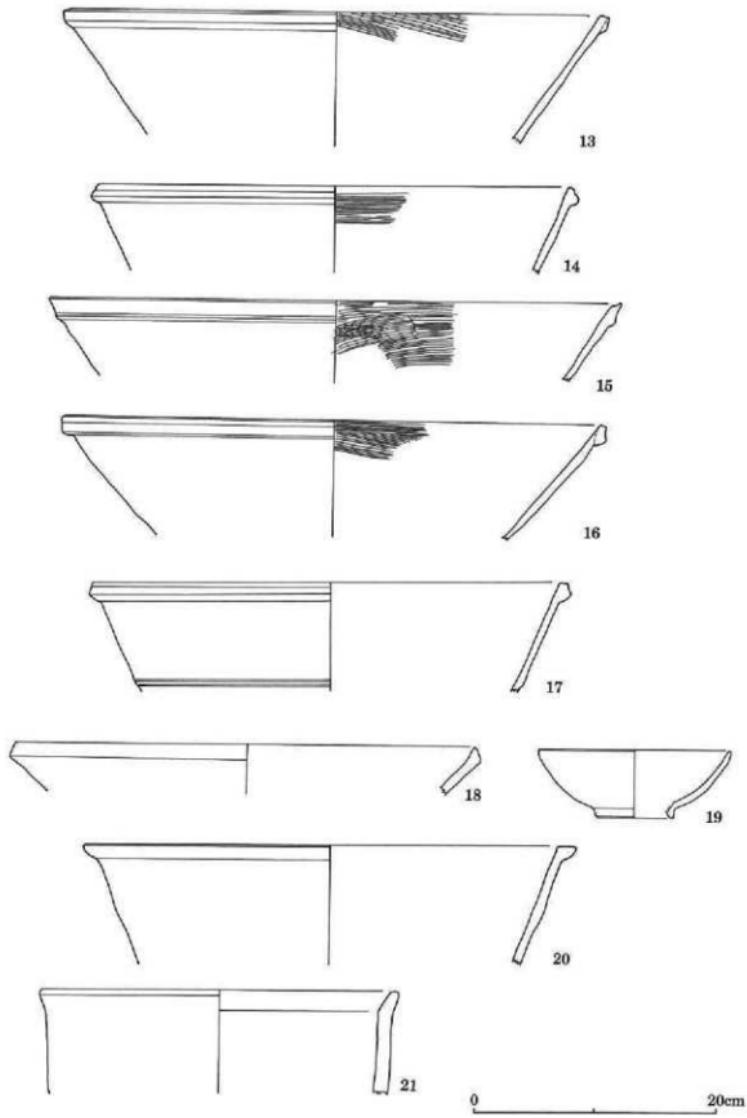


Fig.10 1区出土遺物実測図(2) (1/4)

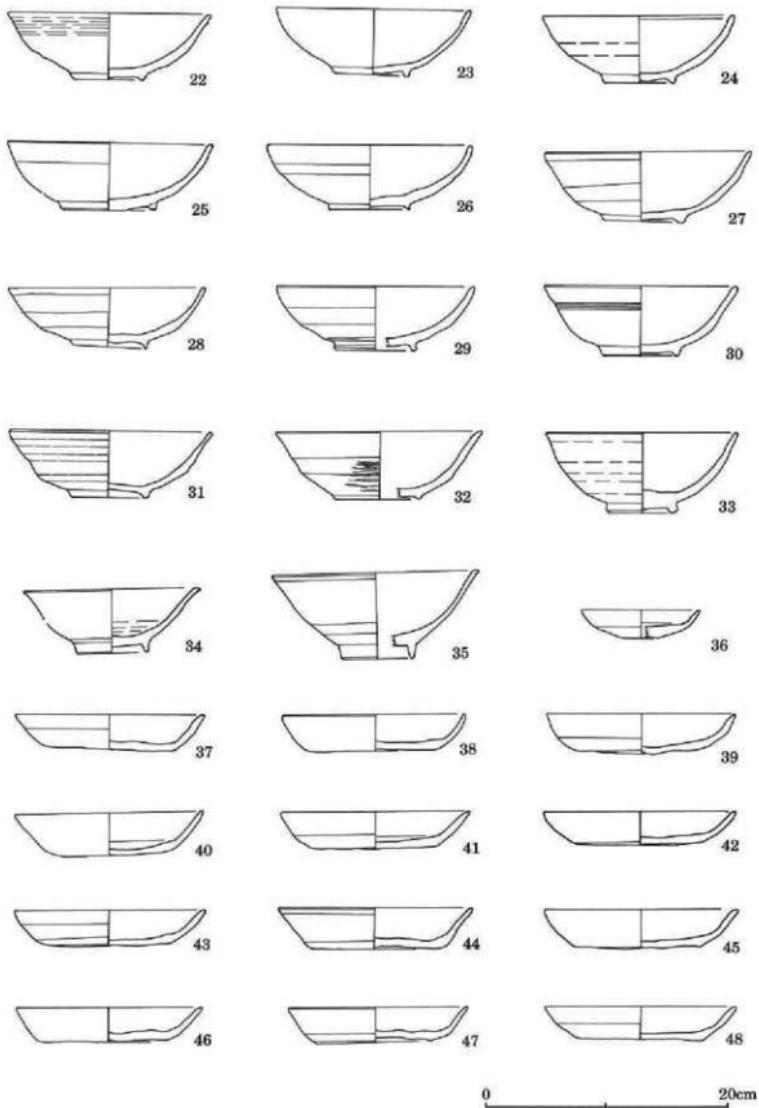


Fig.11 1区出土遺物実測図(3) (1/4)

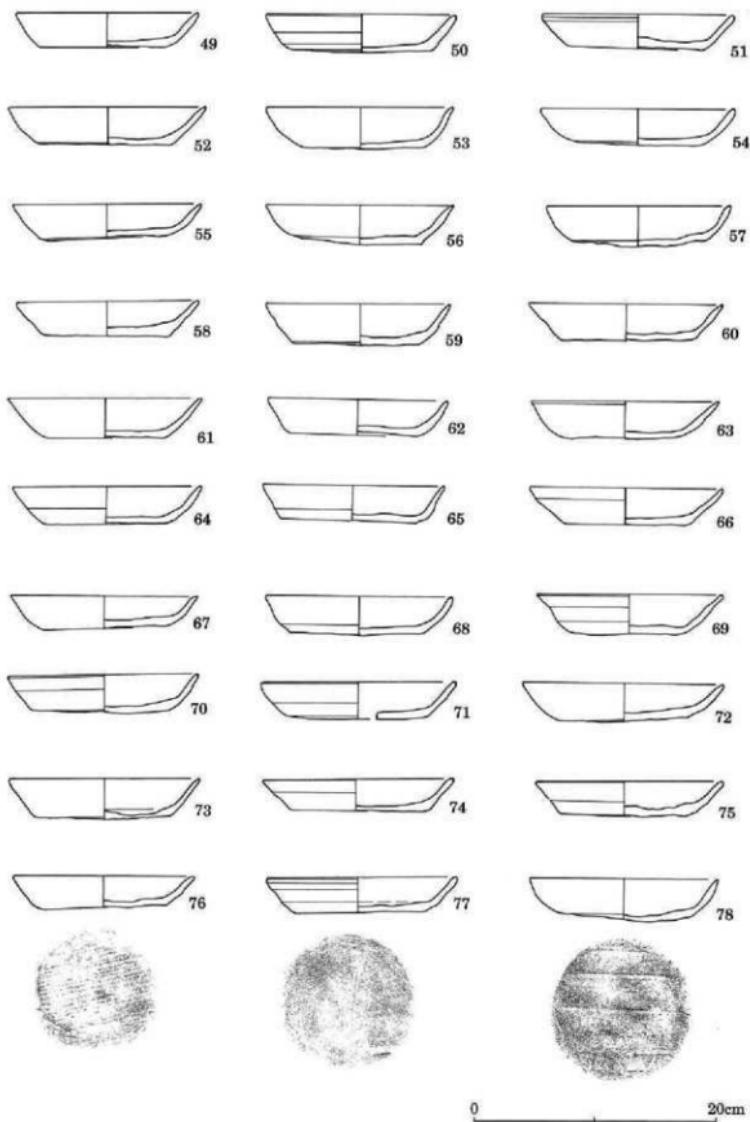


Fig.12 1区出土遺物実測図(4) (1/4)

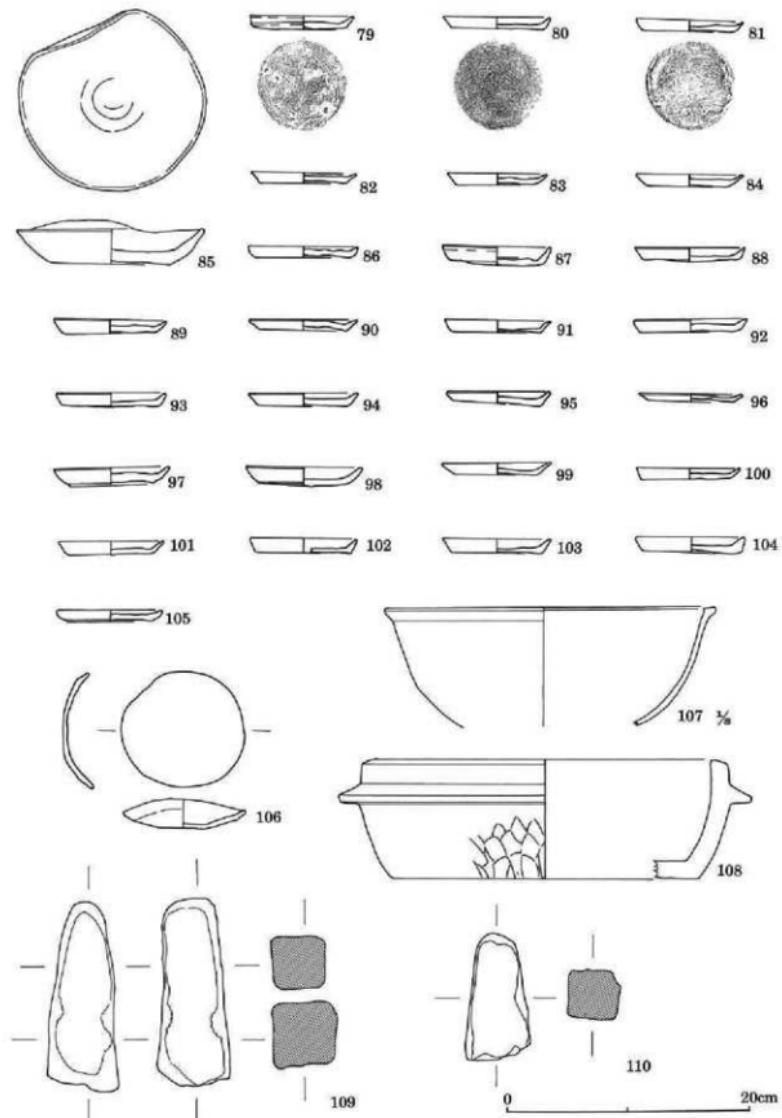


Fig.13 1区出土遺物実測図(5) (1/4)

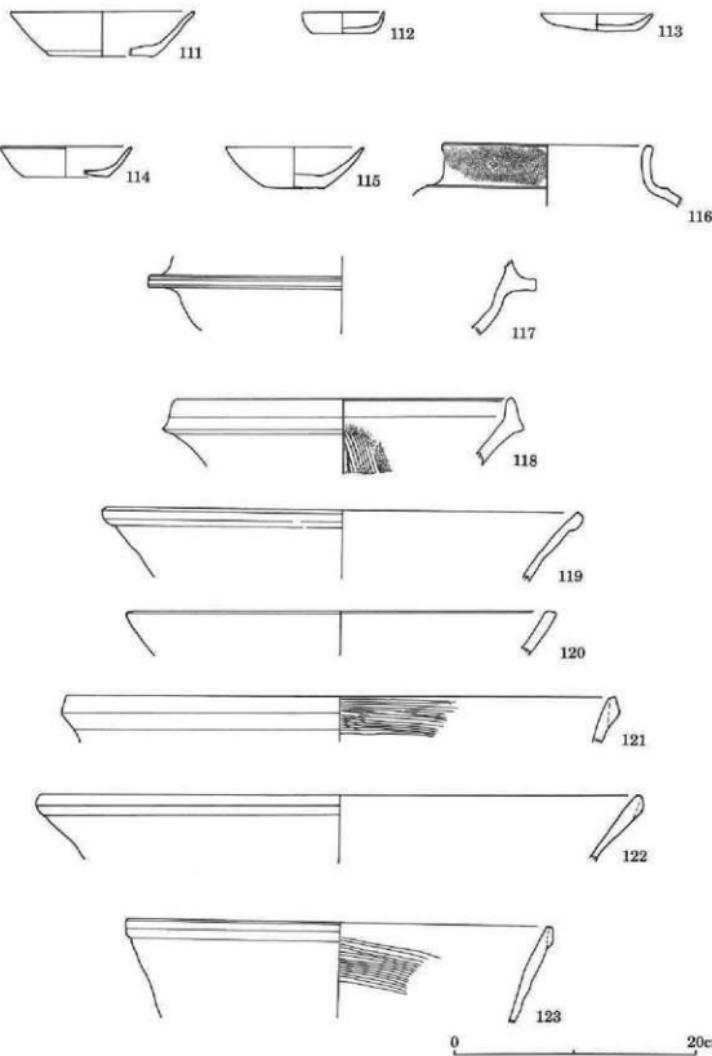


Fig.14 1区出土遺物実測図(6) (1/4)

IV. 平成 20 年度西前牟田遺跡 2 区の調査

1. 調査区と調査の概要 (Fig.2, 3・PL.20)

今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった西前牟田遺跡 2 区は、米多丘陵の西端付近から東へ 30m 程の区域で、これまで畠として利用されており、標高 6m 強、現県道面までの比高は 0.5m 程度、西の三田川町との境界になっている小河川（通称「西の川」）の谷底水田面までは約 1.0m を測る。

調査区内の土層は、西前牟田遺跡 1 区と同様、地表面に畠の耕作土が 15cm～30cm の厚さで堆積しており、その直下は遺構検出面であるいわゆる地山が検出された。今回の調査で検出された堅穴式住居址の深さが比較的浅く壁の立ち上がりを失っている部分も多いところから、一帯が長年の耕作などによって各時代の遺物包含層とその下部の洪積世丘陵自体まである程度の深さですでに削平を受けているものと推測される。

今回の調査区は、道路拡幅工事により削平される範囲を調査の対象としたため、延長約 30m、幅員約 10m の限定された調査区となった。そのため、道路拡幅範囲の法線に沿って調査区の中央に一直線の東西ラインを設定し、このラインを基準として、南北列 2 列、東西列 3 列の 10m×10m グリッドを設定して調査を行った。

今回の西前牟田遺跡 2 区の調査で検出された遺構は、弥生時代から中世におよぶ各時代の遺構が検出されている。堅穴式住居址 4 軒、掘立柱建物址 4 栋、井戸跡 5 基、土壙 21 基、その他ピットなどであった。また、これらの遺構に伴い弥生式土器、土師器、須恵器、中世土器、舶載陶磁器、その他石製品、鉄製品などが出土した。

2. 調査の経過

平成 20 年度の一級県道神埼北茂安線地方道路交付金工事に伴う発掘調査は、道路拡幅工事により削平が予定される現県道南側の丘陵部分について、延長約 30m、幅員約 10m の約 300 m² の部分を便宜的に西前牟田遺跡 2 区として実施した。現地での作業は、平成 20 年 4 月 11 日から 5 月 17 日まで行った。以下、簡略に調査経過を記す。

平成 20 年 5 月 11 日　鳥栖土木事務所担当職員の立会いのもと、調査範囲の確認、残土の取り扱い等について打ち合わせを行い、調査対象地区の西側から重機による表土掘削作業を開始し、西前牟田遺跡 2 区の調査に着手した。表土掘削作業は実質 4 日間を要し、15 日に終了。

14 日　発掘作業員を招集、発掘器材類の搬入、休憩所設営後、すでに表土剥ぎが完了した調査区西側のスペースから遺構検出作業に着手。あわせてグリッド設定、レベル移動など遺構実測作業の準備を行う。以後、4 月一杯は検出された遺構の掘り下げに勢力を投入し、順次遺構の掘り下げ作業を進めて行った。

5 月 1 日　調査区西側より実測作業に着手。出土遺物の取り上げ作業も並行して進めた。

13 日　調査完了状態の写真撮影に向け調査区全体清掃を開始、清掃が住んだ区域から各遺構の個別写真撮影を行う。

14 日　遺構の掘り下げ作業を完了。翌 15 日には全体清掃を終え、調査区全体写真を撮影。発掘器材類を撤収、米多文化財収蔵庫に後片付けを行う。16 日に実測作業も終了。

17 日　重機により調査区の埋め戻しを行い、現場でのすべての作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、平成 19 年度調査の成果とあわせて報告書刊行へ向けた整理作業を 21 年 3 月まで実施した。

4. 遺構 (Fig.3, 15~19・PL.20~23)

平成 20 年度の西前牟田遺跡 2 区の調査で検出された遺構は、前述のように、弥生時代から中世におよぶ各時代の遺構が検出されている。竪穴式住居址 4 軒、掘立柱建物址 4 棟、井戸跡 5 基、土壙 21 基、その他ピットなどであった。これらの遺構に伴い弥生式土器、土師器・須恵器、中世土器、舶載陶磁器、その他石製品、鉄製品などが出土している。

(1) 竪穴式住居址 (Fig.3, 15・PL.21・Tab.3)

前述のように今回の調査で竪穴式住居址は 4 軒が検出された。各住居址の出土遺物は決して多くはなく、明らかに時期が異なる遺物が同一住居内から出土するなど断定はできないものの、各住居址はそれぞれ SH-219 が弥生時代、SH-203、SH-221 が古墳時代後期、SH-213 が奈良時代の所産になるものと推測される。

SH-203 (Fig.15・PL.21)

SH-203 は c-1Gr. で検出された一辺約 4m の方形の竪穴式住居址で今回の調査で検出された住居址のうち最も西に位置している。住居のとくに南側半分は後世の削平を受けており、一部を除いて壁の立ち上がりを失っている。住居東壁際に周溝がめぐる。床面には多数のピットが見えるが、主柱穴は不明。床面積は推定で 15.3 m²。床面までの掘り込みの深さは深いところで 15cm 程度。主軸は住居の南北軸を基準とすると N-24° ·E。

SH-213 (Fig.15・PL.21)

SH-213 は b-1Gr. で検出された長辺 4.3m、短辺推定約 3.4m の長方形の竪穴式住居址。住居の南壁部分は後世の削平に加え、SH-219 と重複しており、壁を検出することができなかった。西壁中央よりやや南に偏った位置に原形はとどめていないがカマドの構築材と思われる山砂が馬蹄形状に堆積しておりこの位置にカマドが設けられていたものと推測される。床面にピットが見えるが、主柱穴は不明。床面積は推定で 12.4 m²。床面までの掘り込みの深さは深いところで 15cm 程度。主軸は住居の長軸を基準とすると N-78° ·W。

SH-219 (Fig.15・PL.21)

SH-219 は b-1Gr. で検出された一辺 3.5m 程のやや胴が張る方形の竪穴式住居址。住居の北側 1/3 程度が後の住居址 SH-213 と重複しており壁の立ち上がりが失われている。床面にピットが見えるが、主柱穴は不明。床面積は推定で 10.7 m²。床面までの掘り込みの深さは 30cm 程度。主軸は住居の南北軸を基準とすると N-26° ·E。

SH-221 (Fig.15・PL.21)

SH-221 は b-1Gr. で検出された一辺が推定約 3.5m~4.0m 程度の推定プラン方形の竪穴式住居址。住居の東壁部分が検出され、住居の西側大半を後の住居 SH-213 に切られている。主柱穴は図示した 4 本と推測される。床面積は不明。床面までの掘り込みの深さは深いところで 10cm 未満。主軸は住居の東壁を基準とすると N-21° ·E。

Tab.3 西前牟田遺跡2区出土堅穴式住居址一覧表

住居址 番号	平面形状	規 格 (m×m)				棟方向	居内施設					出土遺物	時期	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	竪	伊曲零	斜櫛穴	その他			
SH-203	不規方形	(4.1)	(4.0)	0.16	(16.0)	N-24°・E	?	○	—	—	—	黒漆漆坪盤・ミニチュア	古墳?	
SH-213	長方形	(4.1)	(4.0)	0.15	(12.4)	N-78°・W	?	—	竪	—	—	土師器甌・瓦器等・ミニチュア・鉄錠	奈良?	
SH-219	方形	3.5	(3.6)	0.28	(10.7)	N-26°・E	?	—	—	—	—		弥生?	
SH-221	方形	3.5	(4.0)	0.07	—	N-31°・E	4本	—	—	—	—	土師器甌		

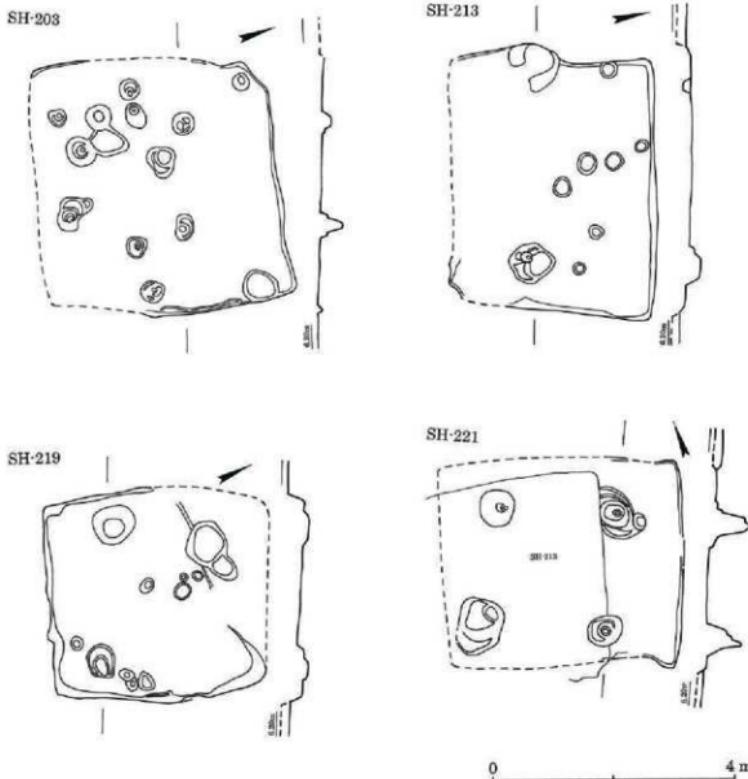


Fig.15 2区堅穴式住居址実測図 SH-203・SH-213・SH-219・SH-221 (1/80)

(2) 据立柱建物址 (Fig.3, 16・PL.3, 4・Tab.1)

前述のように今回の調査で据立柱建物址として扱った建物は4棟である。いずれも小規模な建物で調査区の西部で検出されている。各建物の柱穴には遺物をもつものあるが概して小片で、出土遺物から時期を特定できる建物は皆無であった。

SB-235 (Fig.16)

SB-235は、c-2Gr.の調査区南境界部分で建物の一隅と推測される柱穴が1間×1間分検出された据立柱建物址。建物の北側の柱穴とこの柱穴から柱列が南東および南北方向の調査区外へそれぞれ延びるものと思われる。柱穴は直径25cm～50cm、深さ15cm程度の円形の掘り方。柱間は南東方向が1.5m、南北方向が1.4m。全体の規模は不明。主軸はN・32°・Eである。

SB-236 (Fig.16)

SB-236は、b-1Gr.・c-1Gr.で検出された2間×2間の据立柱建物址。南北列の柱間を見ると中央の柱穴がやや南に偏っており、北辺中央の柱決も見えない。このようなことから、東西方向がやや長い1間×1間の建物の南に半間分の軒などの外部施設が付く建物とも推測できる。柱穴は直径20cm～70cm、深さ15cm～50cm程度の不整形の掘り方で、建物北側の4本の柱穴がやや大きく深さも深い。柱間は南北列がともに1.6m・1.0m、建物北辺が1.9m、南辺が1.1m・0.8m、規模は2.6m×2.0m、床面積5.2m²を測る。南北方向を基準にすると主軸はN・24°・Eである。

SB-237 (Fig.16)

SB-237は、c-2Gr.で検出された1間×1間の据立柱建物址。柱穴は直径15cm～35cm、深さ10cm～30cm程度の円形の掘り方。柱間は建物南西辺がやや広く、規模は1.1m×1.0m、床面積1.1m²を測る。建物南西辺の柱穴を基準にすると主軸はN・50°・Wである。

SB-238 (Fig.16)

SB-238は、b-2Gr.の南側境界部分で検出された1間×1間の据立柱建物址。柱の間隔から調査区外へは広がる可能性はないものと推測される。柱穴は直径20cm～50cm、深さ10cm～30cm程度の円形の掘り方。柱間は建物北西辺、南東辺がやや広く、規模は1.4m×1.3m、床面積1.8m²を測る。建物南東辺の柱穴を基準にすると主軸はN・36°・Eである。

Tab.4 西前牟田遺跡2区出土据立柱建物址一覧表

建物址 番号	平面形態	規 模 (m・m ²)				柱方向	備 考
		桁行	梁行	長さ×幅	床面積		
SB-235	※1×※1	1.5	1.4	※1.5×※1.4	—	N・32°・E	
SB-236	2×2 1×1+0.5	2.6 1.6・1.0	2.0 1.1・0.8	2.6×2.0	5.2	N・24°・E	
SB-237	1×1	1.1	1.0	1.1×1.0	1.1	N・50°・W	
SB-238	1×1	1.4	1.3	1.4×1.3	1.8	N・36°・E	

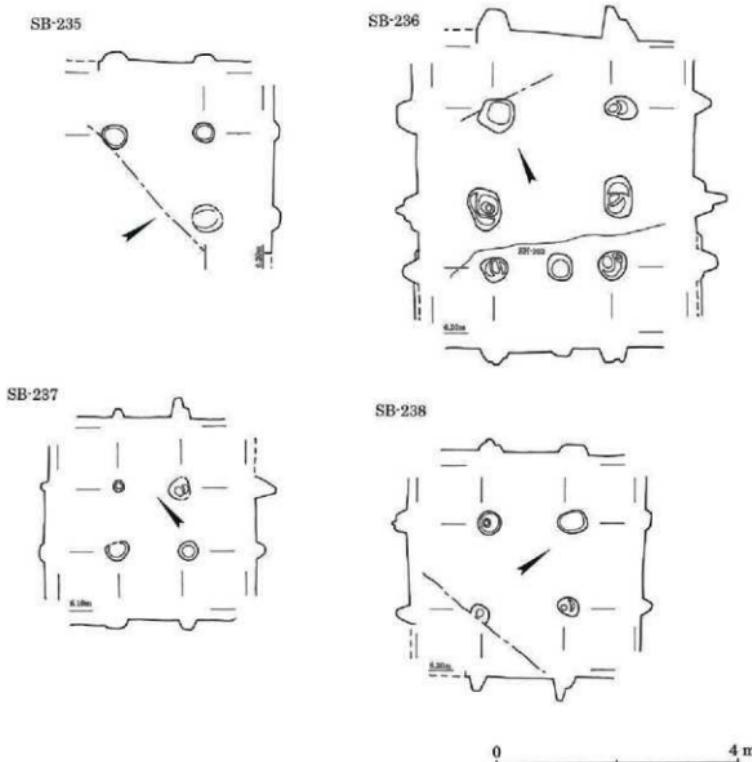


Fig.16 2区掘立柱建物址実測図 SB-235～SB-238 (1/80)

(3) 井戸跡・土壙 (Fig.3, 17~19・PL.22, 23・Tab.5)

西前半田遺跡2区の調査で検出された井戸跡および土壙と考えられる遺構は、井戸跡5基、土壙21基であった。井戸跡5基のうち、出土遺物などから判断するとSE-201が古墳時代後期、他の4基は中世の所産になるものと考えられる。一方、土壙はその時期が特定できないものもあるが、SK-207、SK-210、SK-215が弥生時代中期、SK-209、SK-212、SK-214、SK-227が古墳時代後期、SK-222が奈良時代、その他の大半は中世の所産になるものと考えられる。

以下、井戸跡は個別に報告し、土壙については、形態、法量、主要な出土遺物などを一覧にまとめ報告とする。

SE-201 (Fig.17・PL.22)

SE-201は、調査区西部のc-2Grで検出された井戸跡。掘り方の平面プランは直径1.4m程の不整な円形を呈す。井戸の豊穴は先掘りの円筒状に掘られている。深さ1.2mまで掘り下がったが基底には達しなかった。掘り抜き井戸と推測される。

SE-211 (Fig.17・PL.22)

SE-211は、c-2Gr調査区南境界部分で検出された井戸跡。全体の1/3程を調査した。掘り方の平面プランは不整な梢円形を呈すものと推測される。調査面積が狭く完掘できなかったため規模、深さなどはともに不明。覆土の状況から井戸跡として取り扱った。

SE-216 (Fig.18・PL.22)

SE-216は、a-2Gr調査区南側境界部分で検出された井戸跡。全体の1/3程度を調査した。掘り方の平面プランは上部が一辺2.0m程の不整な方形を呈すものと思われる。一旦上部が1.0m程の深さまで掘り込まれ、この掘り込みの底面にからさらに直径1.0m程の井戸基底部が一段掘り込まれている。基底までの深さは約1.3m。調査面積が狭く完掘できず規模は不明。覆土の状況から井戸跡として取り扱った。溜井戸。

SE-225 (Fig.18・PL.23)

SE-225は、a-2Gr調査区南側境界部分で検出された井戸跡。全体の3/4程度を調査した。掘り方の平面プランは直径3.0m程度のやや不整な円形を呈し、上部は段階的に1.4mほど掘り込まれさらにここから長径1.2m以上、短径1.0mの不整な梢円形の井戸本体の縦坑が続くものと思われるが、安全面を考慮し掘り下げを中止した。掘り抜き井戸と推測される。

SE-229 (Fig.19・PL.23)

SE-229は、a-1Gr・b-1Gr調査区北側境界部分で検出された井戸跡。全体の3/4強を調査した。掘り方の平面プランは直径1.9m程度のやや不整な円形を呈し、漏斗状に深さ1.2m程掘り込まれここから直径0.8m程の井戸本体の縦坑が続くものと思われるが、安全面を考慮し掘り下げを中止した。掘り抜き井戸と推測される。

Tab.5 西前牟田遺跡2区出土井戸跡・土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面・下段…底面 単位:m・m ²)				出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積		
SE-201	不整円形	1.36 —	※1.15 —	※1.2	—	土師器甕・壇	
SE-211	不整梢円形	※1.3 ※1.3	※0.5 ※0.3	0.92	※0.4	須恵器甕・土師器甕・瓶	
SE-216	不整方形	※2.1 ※1.9	※1.0 ※0.9	1.08	※0.5		
SE-225	不整円形	3.20 2.67	※1.9 ※1.6	※1.33	—	瓦器甕・船載青磁碗・小皿	
SE-229	不整円形	1.91 1.53	1.30 1.00	1.20	—	土師器甕・小皿・鉄釘	
SK-202	隅丸長方形	※2.3 ※1.7	※1.0 ※0.8	0.80	※1.1	瓦器甕・鉄刀	

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面、下段…底面 単位: m・m ²)				出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積		
SK-204	不整形	1.60 1.42	1.46 1.36	0.10	1.4		
SK-205	不整形	3.02 2.88	1.74 1.38	0.11	3.8		
SK-206	不整形	※3.7 ※3.4	※1.7 ※1.6	0.13	※3.1		
SK-207	不整円形	1.66 1.25	1.46 1.20	0.56	1.0	弥生式土器壺・土製管玉	
SK-208	不整円形	1.20 0.85	1.05 0.80	0.42	0.6		
SK-209	円形	(0.9) 0.87	0.80 0.27	0.44	0.2	土師器壺	
SK-210	不整円形	※1.0 ※0.9	1.26 0.88	0.60	※1.0	弥生式土器壺・土師器壺・ガラス製小玉・碧玉製小玉	
SK-212	不整形	3.52 2.80	2.26 2.00	0.54	5.0		
SK-214	不整形	※1.8 ※1.8	1.60 1.56	0.13	※2.0	須恵器壺蓋	
SK-215	不整形	※0.9 ※0.8	※0.8 ※0.5	0.55	※0.7	弥生式土器壺・甕・壺・鉢	
SK-217	偶丸長方形?	※1.4 ※1.3	※0.8 ※0.8	0.06	※0.9		
SK-218	不整椭円形	※1.5 ※1.4	1.45 1.30	0.19	※1.6		
SK-220	不整形	※3.3 ※3.2	1.03 0.64	0.28	※2.0		
SK-222	不整長円形	2.58 2.16	1.33 1.10	0.20	2.2	土師器壺・甕・須恵器壺	
SK-223	不整円形	1.03 0.60	0.74 0.55	0.37	0.3	石繩	
SK-224	不整形	※2.51 ※2.45	※1.85 ※1.73	0.12	※3.6		
SK-227	不整形	1.50 1.04	※0.9 ※0.8	0.57	※0.5	土師器壺・甕・須恵器壺蓋・鐵滓	
SK-228	不整円形	※1.0 0.90	1.20 0.57	0.58	0.5		
SK-230	不整形	(2.9) (2.6)	1.54 1.34	0.06	2.3		
SK-233	不整形	1.14 1.08	※1.0 ※0.9	0.15	※0.7		

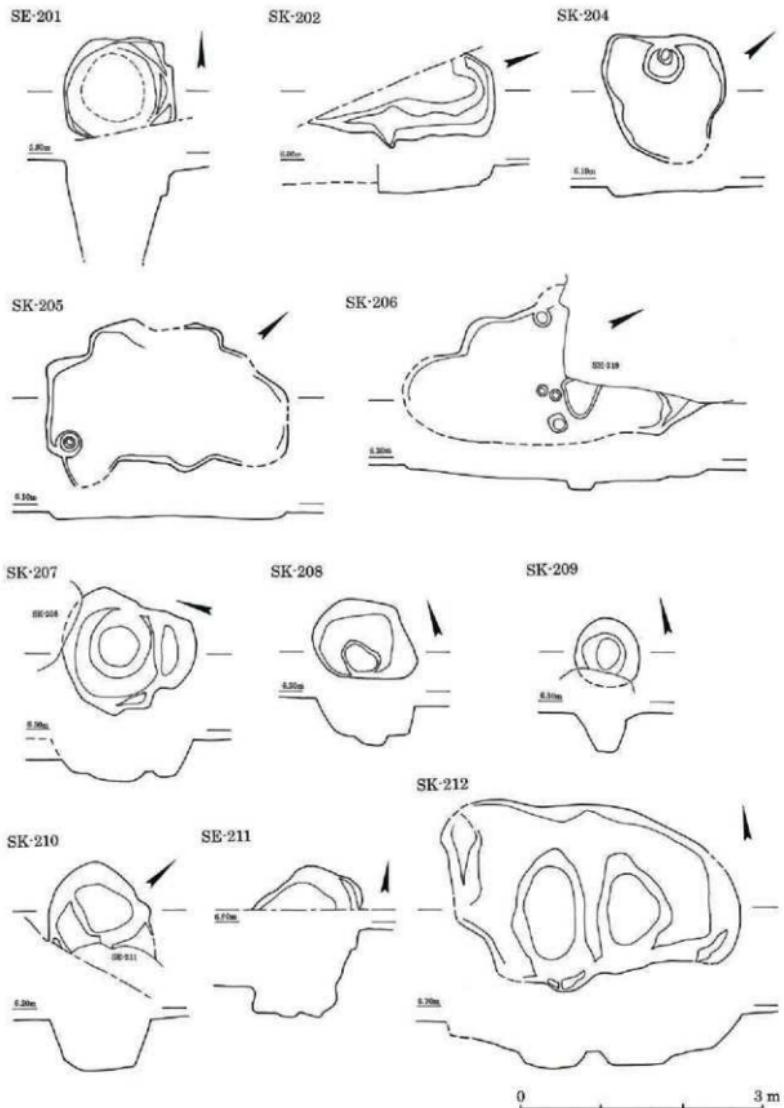


Fig.17 2区井戸跡・土壤実測図 (1) SE-201-SK-202-SK-204～SK-212 (1/60)

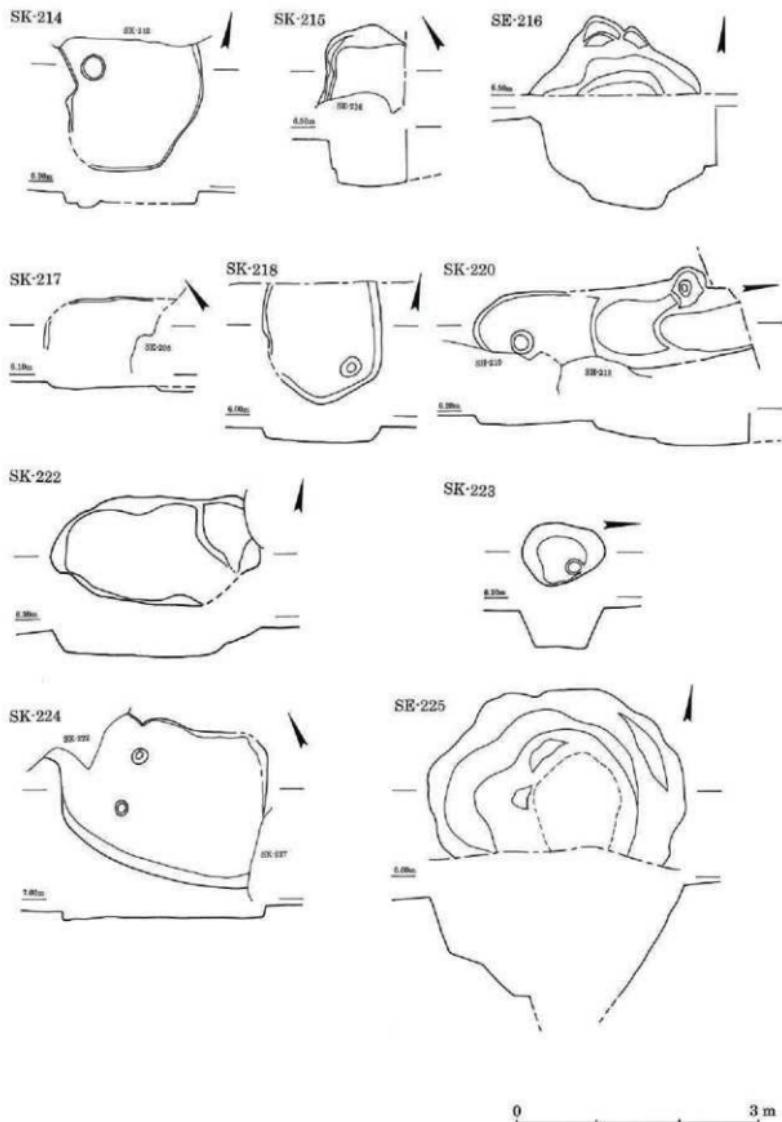


Fig.18 2区井戸跡・土壤実測図(2)
SK-214・SK-215・SE-216・SK-217・SK-218・SK-220・SK-222～SK-224・SE-225 (1/60)

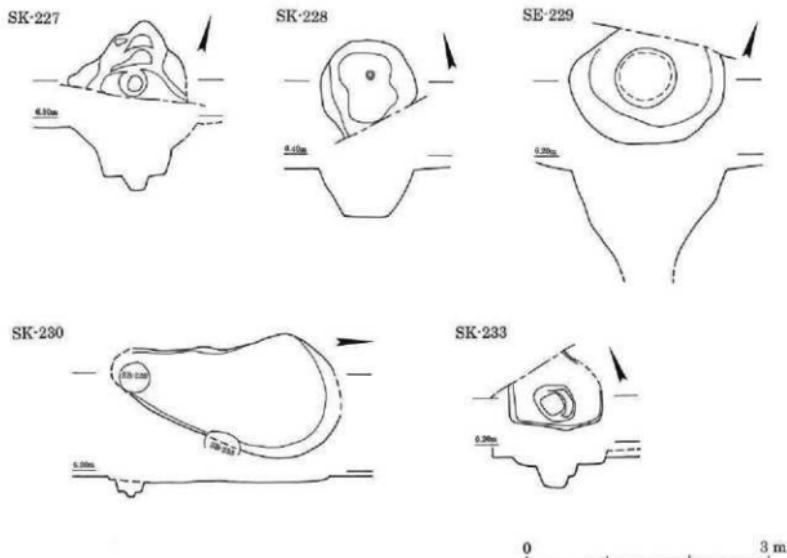


Fig.19 2区井戸跡・土壤実測図 (3) SK-227・SK-228・SE-229・SK-230・SK-233 (1/60)

4. 遺物 (Fig.20~23・PL.24~29)

平成20年度の西前半田遺跡2区の調査では、弥生式土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、中世の土師器皿・小皿、瓦器塊、土鍋などの土器類、青磁碗・青磁皿・白磁碗などの舶載陶磁器類、土製品、石製品、鉄製品などが各遺構から出土した。各遺構からの遺物の出土量は決して多くはない。

ここでは、出土した遺物のうち図示できるものについて出土した遺構ごとに報告したい。

SE-201 出土遺物 (Fig.20・PL.24)

1~3は土師器塊 1は丸底の底部で胴部は球形に近く口縁は外反しながらやや開く。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ。2は縱長の胴部で直立する口縁が外反し小さく開く。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ。3は口縁が外反しながら開き口縁端が小さくつままれている。4,5は土師器塊。丸底で体部が内湾しながら口縁に至る。4は口縁がやや内傾し、5は口縁がほぼ直立する。いずれも内外面ともにナデ。

SK-202 出土遺物 (Fig.20・PL.24, 31)

6は瓦器塊。高台は太いが短く体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る。60は鉄刀。刀身の部分が部分的に長さ $19.3\text{cm} + 7.7\text{cm}$ あわせて 30cm 弱が出土した。遺存状態は悪い。かなり錆付いており正確な計測できなかつたが、刀身の幅は 3.0cm 、身幅は峰の部分で 1.0cm 弱、断面は細長い逆三角形を呈す。

SH-203 出土遺物 (Fig.20・PL.24, 25)

7は須恵器壺蓋。天井部は円形を呈し口縁は小さく外反し開く。天井部外面は回転ヘラケズリ、体部外面にはクロ口目を残す、内面はナデ。天井外面遺存部に細いヘラ書き文が見える。8は土師器ミニチュア塊。

SK-207 出土遺物 (Fig.20・PL.25)

9は弥生式土器塊。不整な丸底で体部は直線的に外傾し口縁に至る。内外面ともにナデ。10は土製管玉。長さ4.5cm、最大径1.2cm、重さ6.1g、0.2cm程の穴が貫通している。

SK-209 出土遺物 (Fig.20・PL.25)

11は土師器壺。体部は浅く口縁は小さく張り出し、やや内傾する返りが付く。調整不明。

SK-210 出土遺物 (Fig.20・PL.25, 31)

12は弥生式土器甕。逆「L」字形口縁の甕で胴部上位は内湾している。13は土師器甕。口縁は外反しながら外傾し開く。61は小玉類。写真上段左から1~5、下段左から6~9。61-1はガラス製で瑠璃色を呈す、他は石製で碧玉製。以下法量等を一覧表にまとめ報告とする。

Tab.6 西前牟田遺跡2区SK-210出土玉類一覧表

遺物番号	法 量 (mm・g)				材質	備考
	長さ	直径	内径	重さ		
61-1	0.5	※0.3		0.1	ガラス製	1/2以上欠損
61-2	0.4	0.6	0.3	0.1	碧玉製	
61-3	0.2	0.5	0.2	0.1	碧玉製	
61-4	0.2	0.4	0.2	—	碧玉製	重さ計測不能
61-5	0.2	0.5	(0.2)	—	碧玉製	重さ計測不能
61-6	0.3	0.5	0.2	0.1	碧玉製	
61-7	0.3	0.6	0.2	0.1	碧玉製	
61-8	0.2	0.5	0.2	0.1	碧玉製	
61-9	—	—	—	—	碧玉製	小片

SK-212 出土遺物 (Fig.20・PL.25, 26)

14・15は須恵器壺。14は底部が平底に近く体部は内湾し口縁が小さく張り出す。返りは直線的でやや内傾し立ち上がる。15は底部が丸底で体部が開き口縁に至る。口縁の張り出しが小さいが鋭い。短くやや外反する小さな返りが付く16・17は土師器甕。胴部は上位で肩が張り、大きく外反し口縁に至る。17は胴部上がやすっぽり短い口縁が小さく外反し開く。18は土師器瓶。丸底で胴部は素直に開き口縁となる。底部は直径4.0cmの円形の穴が焼成前に穿孔されている。外面ハケメ。

SH-213 出土遺物 (Fig.21・PL.26, 31)

19~21は土師器甕。19は長胴甕。丸底で胴部中位に最大径をもち、頸部はくびれ肥厚しやや外反する口縁が外傾し大きく開く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。20は丸底で胴部上位が張る。頸部のくびれが顕著で口縁は外傾外反し開く。内面ヘラケズリ、外面肩部にハケメを残す。21は胴部の張りはなく口縁が外反し開く。内面ヘラケ

ズリ、外面ハケメ。22 は須恵器坏。底面は平底で、底面外周よりやや内側に低く鈍い高台が付く体部は腰の張りが強く口縁はやや外傾する。23 は土師器ミニチュア。62 は鉄製の鎌。基部の柄に装着するための袋部分を欠く。遺存部長 18.5cm、刃部の幅は基部に近い部分で 3.5cm、先端に近い部分で 2.5cm、厚みは基部に近い部分で 1.2cm、先端に近い部分で 0.8cm を測る。

SK-214 出土遺物 (Fig.21・PL.26)

24 は須恵器坏蓋。天井部は円形を呈し口縁端が小さくつままれている。天井部外面は回転ヘラケズリ、体部外面にはロクロ目を残す、内面はナデ。

SK-215 出土遺物 (Fig.21, 22・PL.26~28)

25 から 38 はいずれも弥生式土器。25~27 はいずれも朝顔状に開く壺の口縁部。内外面ともにナデ。27 は外面遺存部が赤色塗彩されている。28~32 は逆「L」字形口縁の壺。28 は胴部上位が内湾する。31 は外面にハケメを残す。32 は口縁端部外周に刻み目がめぐり、口縁下部に断面が「m」字型を呈す突帯がめぐる。遺存部は内外面ともに赤色塗彩されている。33 は広口壺平底の底部で胴部中位に最大径をもつ。短い口縁がほぼ水平に開く。34~37 は塊類。いずれも内外面ともにナデ。35 は遺存部が内外面ともに赤色塗彩されている。38 は逆「L」字形口縁の鉢。口縁下部に断面三角形の突帯がめぐる。遺存部は内外面ともに赤色塗彩されている。内外面ともにナデ。

SH-221 出土遺物 (Fig.22・PL.28)

39、40 は土師器甕。頸部がくびれ、いずれも口縁が緩やかに外反し聞く。内面ヘラケズリ、外面ナデ。

SK-222 出土遺物 (Fig.22)

41 は土師器。甕と推測される。胴部上位は外傾し小さな口縁が外版し聞く。42、43 は須恵器坏。42 は平底に近く体部は緩やかに内湾しながら開き口縁に至り、口唇が小さく外反する。43 は高台坏。底部外周よりやや内側に高台がめぐる。体部は腰が張り上部で外反し口縁に至る。

SK-223 出土遺物 (PL.31)

64 は石鎚。回基式で両側辺には鋸歯状に刃部が作り出されている。先端と一方の基部を欠く。遺存部で長さ 1.8cm、幅 1.0cm、厚さ 0.4cm、重さ 0.6g。黒曜石製。

SE-225 出土遺物 (Fig.22・PL.28, 29)

44、45 は瓦器塊。44 は体部が直線的に開き口縁に至る。「ハ」の字形に聞く高台が付く。45 は体部が内湾しながら開く。46 は青磁小皿。やや上げ底の底部で体部はほぼ水平に広がり口縁が外傾し立ち上がる。見込みにヘラ描き文をもつ。底面は無釉。47 は青磁碗。体部は直線的に開き口縁に至る。幅広の高台が削り出されている体部内面にヘラ描き文が施文されている。高台内と高台周りは無釉。同安窯系の製品。

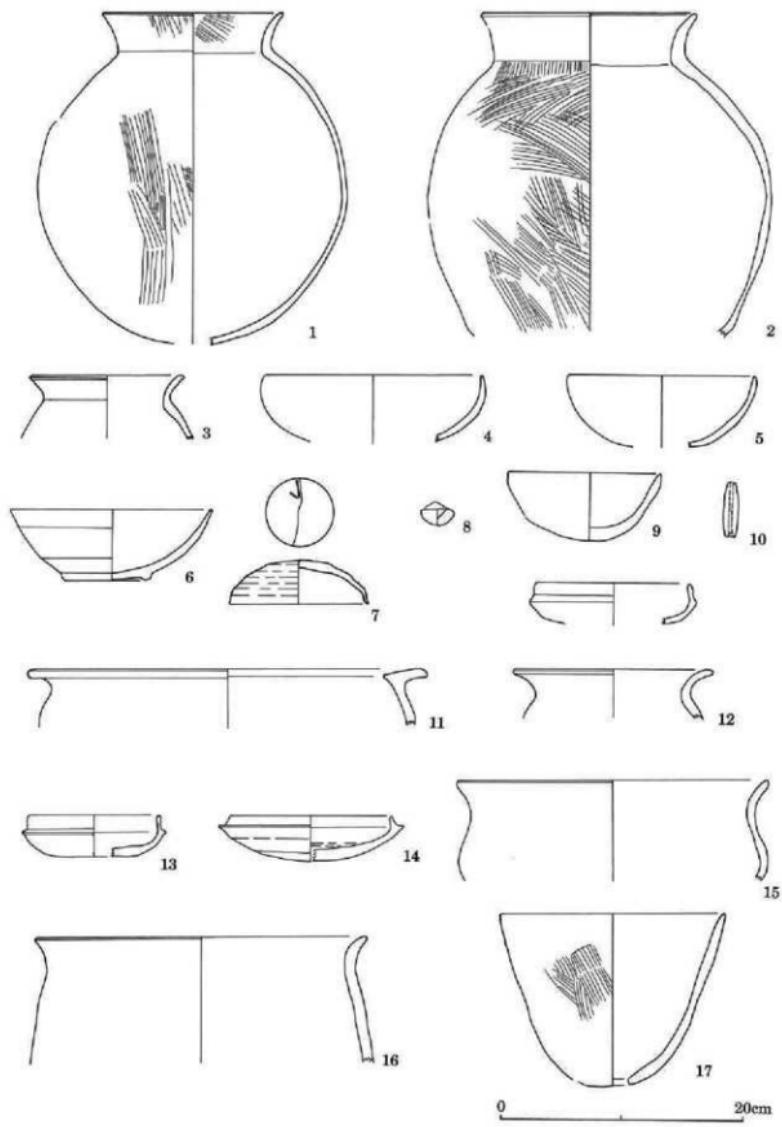


Fig.20 2区出土遺物実測図 (1) (1/4)

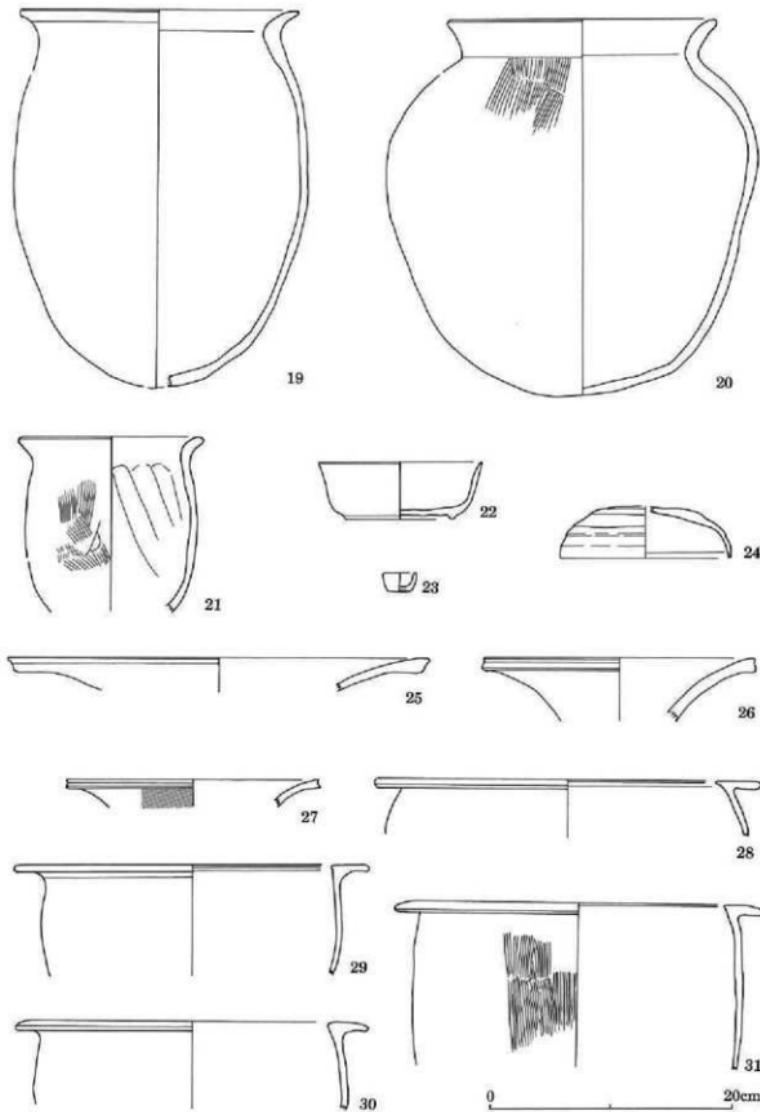


Fig.21 2 区出土遺物実測図(2) (1/4)

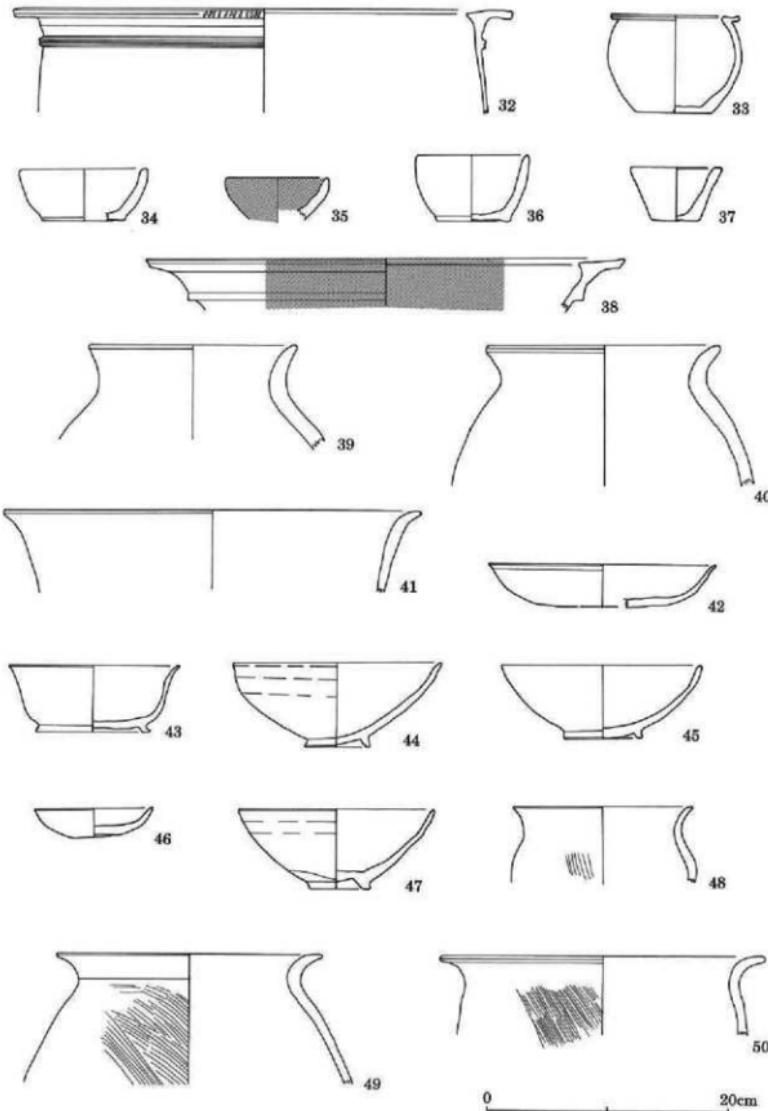


Fig.22 2区出土遺物実測図(3) (1/4)

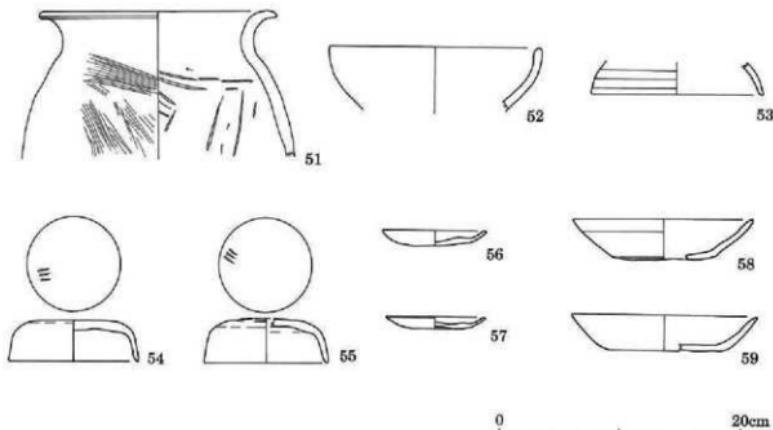


Fig.23 2区出土遺物実測図(4) (1/4)

SK-227 出土遺物 (Fig.22, 23・PL.29~31)

48~51は土師器甕。48は口縁が緩やかに外反する。49、51は胸部が張りをもち頸部がくびれ、口縁は外反し大きく聞く。50は胸部の張りがなく口縁が大きく外反し聞く。いずれも、内面ヘラケズリ、外面ハケメ。52は土師器壇。内湾しながら立ち上がる口縁の内側がわずかに肥厚する。内外面ともにナデ。53~55は須恵器坏蓋。53は天井部が丸みを帯びる蓋の口縁部。54、55は扁平な天井部をもち口縁がやや外傾する。上部は回転ヘラケズリ。上面に「川」の字状の細かなヘラ描きをもつ。56は鉄滓。重量 129.1g。

SE-229 出土遺物 (Fig.22, 23・PL.30, 31)

56、57は土師器小皿。円盤状の底部に短く小さい口縁が付く。58、59は土師器皿。平底の底部で体部が直線的に開き口縁に至る。66は鉄釘。遺存長 3.5cm。

V. まとめ

平成 19 年度および 20 年度の県道改良工事に伴う西前半田遺跡の発掘調査は、1 区、2 区合わせても調査区の延長約 100m、幅員が 7m~10m という限定された範囲の調査であった。しかし、質量ともに予想を上回って弥生時代から中世に及ぶ各時代の遺構が検出され、これらの遺構から多様な遺物が検出された。

大字前半田地区の丘陵上に広がる遺跡については、中世以来集落として発達してきたこの一帯では、これまで本格的な発掘調査の例は無く、今回の調査がはじめての調査例であり、いまだにこの地区的遺跡の実態はほとんど把握できていない。今回の調査対象地区あるいは米多丘陵上の遺跡の全体像については、今後の調査例を待つて検討することとしたい。ここでは、今回検出された遺構や遺物について調査所見を簡単に述べ、まとめとする。

SE-110 出土遺物について

今回の調査で井戸跡 SE-110 から、中世の遺物が大量にまとまって検出された。これらの遺物は井戸の廃棄とともに当時日常的に使用されていた土器などが投げ込まれたものと思われ、12 世紀後半から 13 世紀にかけて一括資料として、今後のこの地域における中世遺跡の調査の際の指標となる遺物群といえる。

船載陶磁器類について

また、船載陶磁器類については本書では一部しか図示し得なかったが、このほか他の中世の遺構からも小破片などを含めるとかなりの量が出土している。時代はやや遡るが SB-112 のような大型建物も確認されていることなどから、古代以来この地を占有してきた集団が社会的にかなりのステータスにあったものと推測できる。三田川町側の下中村遺跡群との関連等もこれから考えていかなければならない課題といえよう。

SK-215 出土遺物について

2 区の調査で検出された弥生時代中期後半の土壙 SK-215 からは赤色繪彩された土器群が出土しており、祭祀関連の遺構の可能性が高い。このようなことから、町北部の船石遺跡や八幡遺跡を営んだ弥生集団と同様に、町南部の前半田地区においても「ムラ」の中に祭祀を司る者を擁するような集団が存在していたことが推測される。

以上、簡単に所見だけを述べたが、前述したように米多丘陵上の遺跡の調査は未だに部分的なものである。ここで、この地域の動向について言及することは控えさせていただき、今後の調査に期待したい。

図 版



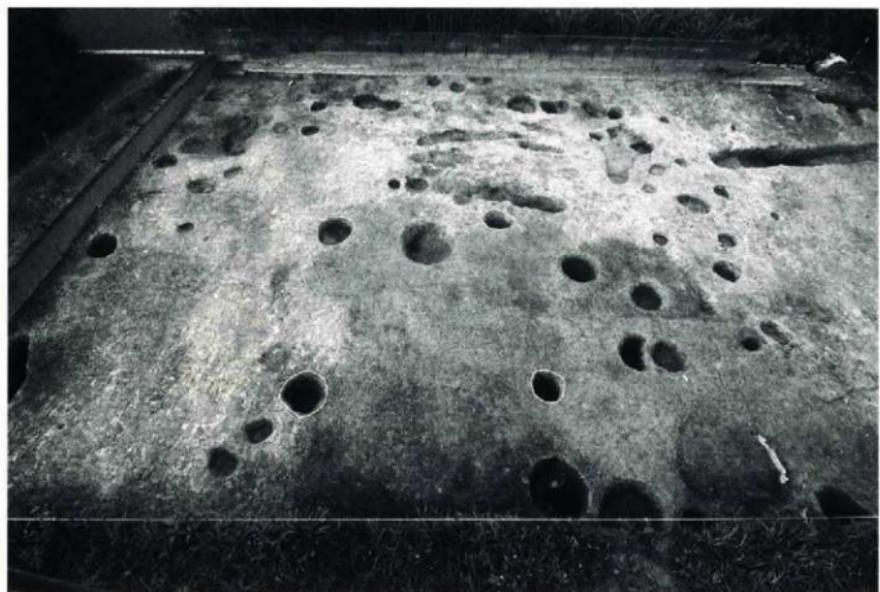
西前半田遺跡 I 区全景 一東より一



西前牟田遺跡I区調査区東部 一西より一



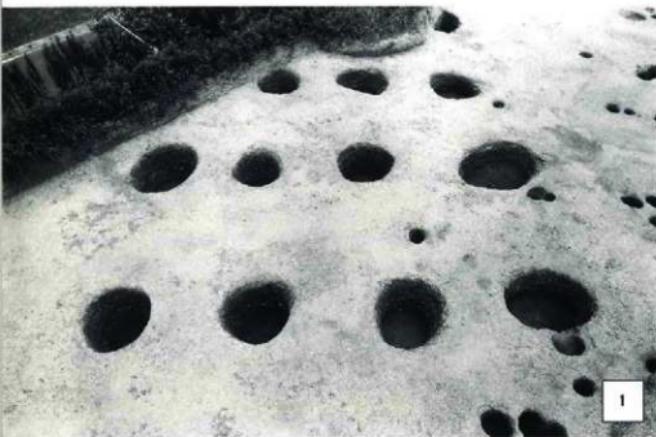
西前牟田遺跡I区調査区西部 一東より一



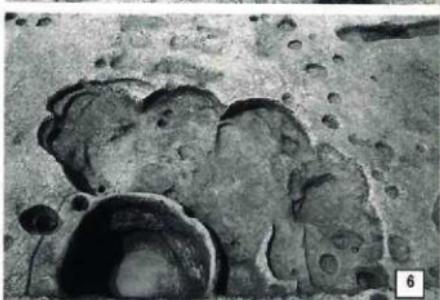
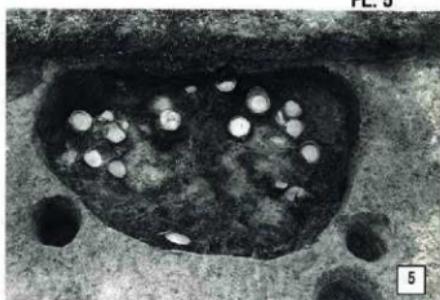
SB-111 一南より一



SB-112 確認状態 一南西より一

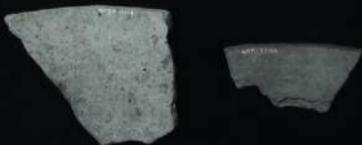


1 SB-112 —南西より—
2 SE-103-SD-104 —南より—
3 SE-101-SD-106 —南より—





1



5



2



6



3



7



4



8

1 1 SE-103 出土
 2 2·3·4 SD-104 出土
 3 2·3·4 SD-104 出土
 4 5·6 SD-104 出土

5 5·6 SD-104 出土
 6 7 SD-104 出土
 7 9 SD-104 出土
 8 10·8 SD-104 出土



1



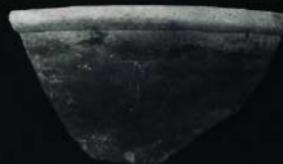
5



2



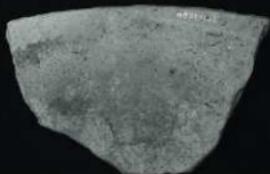
6



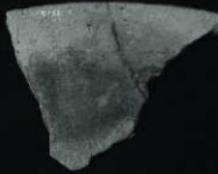
3



7



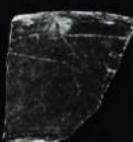
4



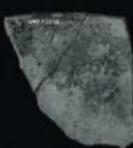
8

- 1 11 SD-104 出土
2 12 SD-104 出土
3 13 SD-106 出土
4 13 SD-106 出土

- 5 14-15 SD-106 出土
6 14-15 SD-106 出土
7 16 SD-106 出土
8 16 SD-106 出土



1



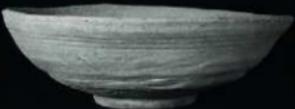
2



3



4



5



6



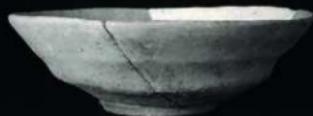
7



8

1 17 SD-106 出土
2 17 SD-106 出土
3 18-19 SE-107 出土
4 18-19 SE-107 出土

5 22 SE-110 出土
6 23 SE-110 出土
7 24 SE-110 出土
8 27 SE-110 出土



1



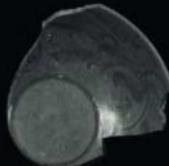
5



2



6



3



7



4



8

- 1 31 SE-110 出土
2 33 SE-110 出土
3 33 SE-110 出土
4 33 SE-110 出土

- 5 34 SE-110 出土
6 34 SE-110 出土
7 34 SE-110 出土
8 36 SE-110 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

1 37 SE-110 出土
2 38 SE-110 出土
3 39 SE-110 出土
4 40 SE-110 出土

5 41 SE-110 出土
6 42 SE-110 出土
7 43 SE-110 出土
8 44 SE-110 出土



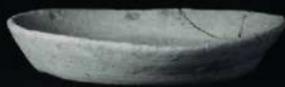
1



5



2



6



3



7



4



8

- 1 45 SE-110 出土
2 46 SE-110 出土
3 47 SE-110 出土
4 48 SE-110 出土

- 5 49 SE-110 出土
6 50 SE-110 出土
7 51 SE-110 出土
8 52 SE-110 出土



1



5



2



6



3



7



4



8

1 53 SE-110 出土

2 54 SE-110 出土

3 55 SE-110 出土

4 56 SE-110 出土

5 57 SE-110 出土

6 58 SE-110 出土

7 59 SE-110 出土

8 60 SE-110 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

1 63 SE-110 出土

2 64 SE-110 出土

3 65 SE-110 出土

4 66 SE-110 出土

5 67 SE-110 出土

6 68 SE-110 出土

7 69 SE-110 出土

8 70 SE-110 出土



1



2



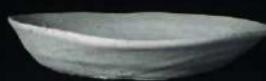
3



4



5



6



7



8

1 71 SE-110 出土
2 72 SE-110 出土
3 73 SE-110 出土
4 74 SE-110 出土

5 75 SE-110 出土
6 76 SE-110 出土
7 77 SE-110 出土
8 78 SE-110 出土



1



5



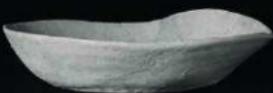
2



6



3



7



4



8

- 1 79 SE-110 出土
2 80 SE-110 出土
3 81 SE-110 出土
4 82 SE-110 出土

- 5 83 SE-110 出土
6 84 SE-110 出土
7 85 SE-110 出土
8 86 SE-110 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

1 87 SE-110 出土
2 88 SE-110 出土
3 89 SE-110 出土
4 90 SE-110 出土

5 91 SE-110 出土
6 92 SE-110 出土
7 93 SE-110 出土
8 94 SE-110 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

1 95 SE-110 出土

2 96 SE-110 出土

3 97 SE-110 出土

4 98 SE-110 出土

5 99 SE-110 出土

6 100 SE-110 出土

7 101 SE-110 出土

8 102 SE-110 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

- 1 103 SE-110 出土
2 104 SE-110 出土
3 105 SE-110 出土
4 106 SE-110 出土

- 5 107 SE-110 出土
6 108 SE-110 出土
7 110-109 SE-110 出土
8 112 SK-113 出土



1



2



3



4



5



6



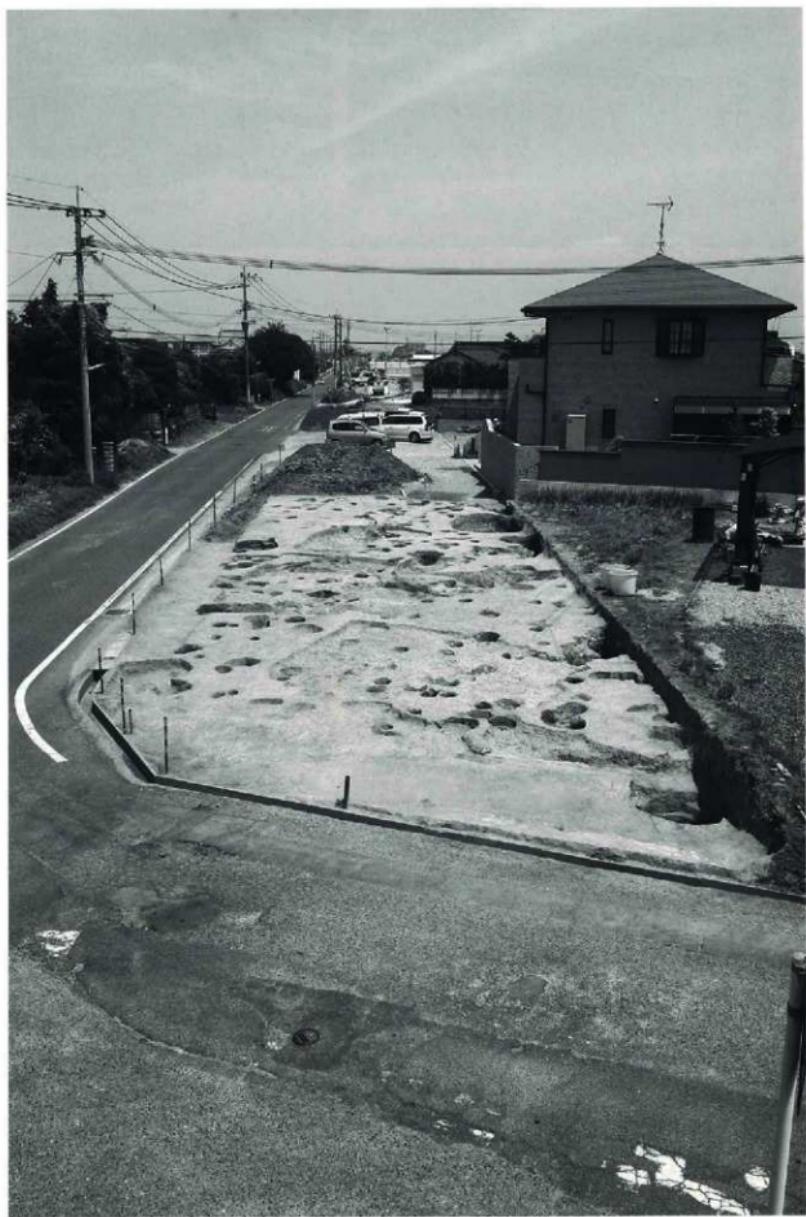
7



8

- 1 113 SK-117 出土
2 117·116 SD-122 出土
3 118 SD-122 出土
4 121·122·123 SD-122 出土

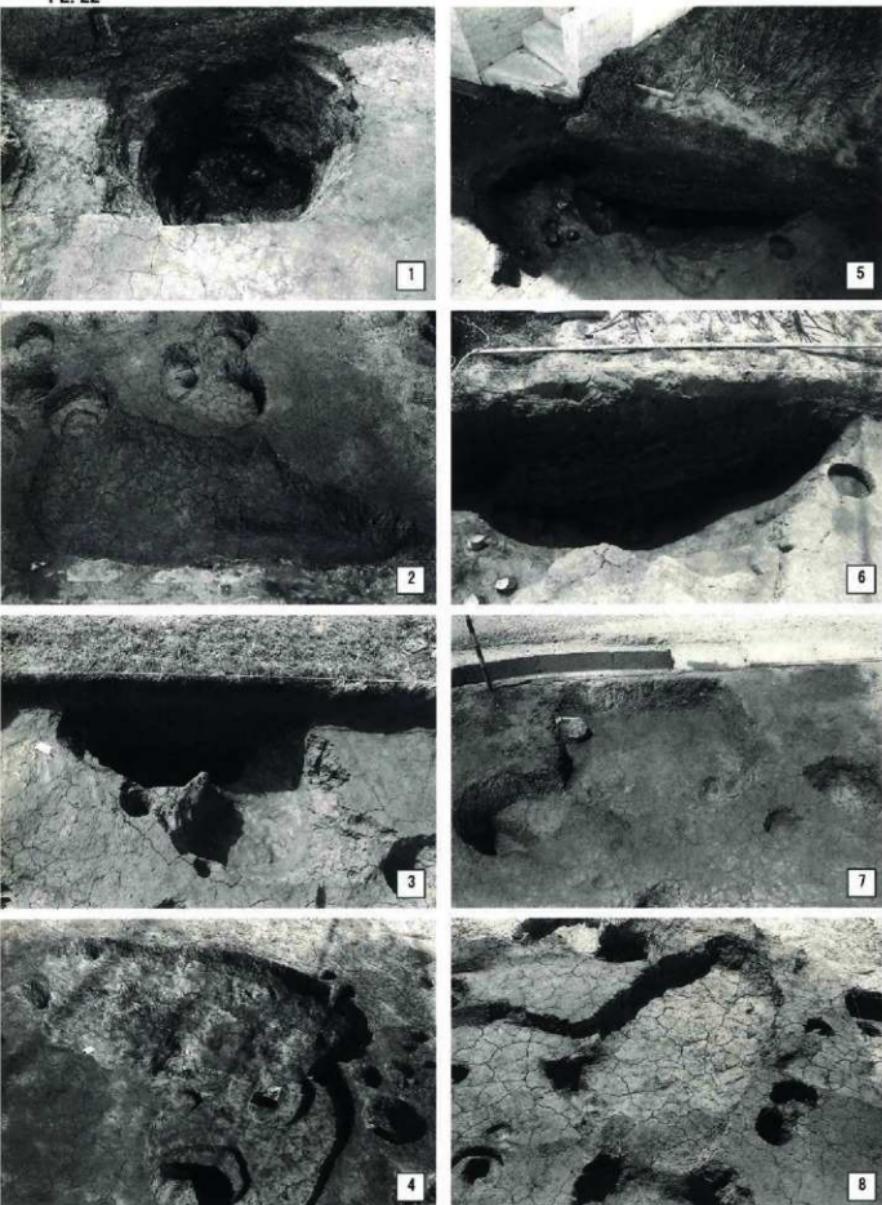
- 5 124 SD-104 出土
6 125 SE-110 出土
7 126 SE-110 出土
8 127 SE-110 出土



西前半田遺跡 2 区全景 一西より一

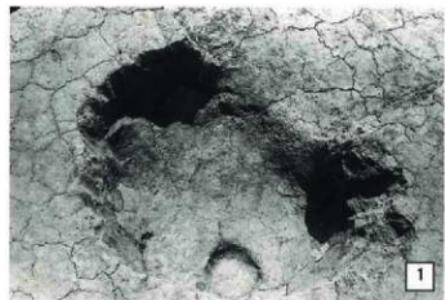


1 SH-203 一北東より
2 SH-213・SH-219 一北より
3 SH-219・SH-213・SH-221
一南より一



1 SE-201 一北より
2 SK-202 一西より
3 SK-210・SE-211 一北より
4 SK-212・SK-214 一南より

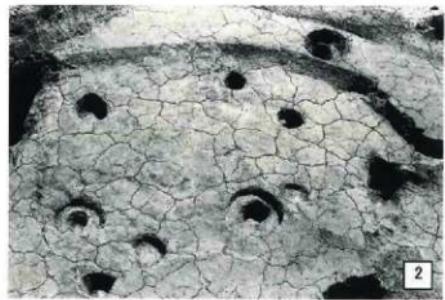
5 SK-215・SE-216 一北東より
6 SE-216 一北より
7 SK-218 一南より
8 SK-218 一東より



1



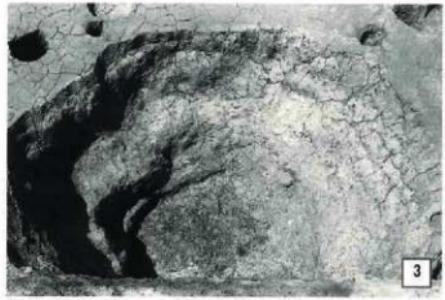
5



2



6



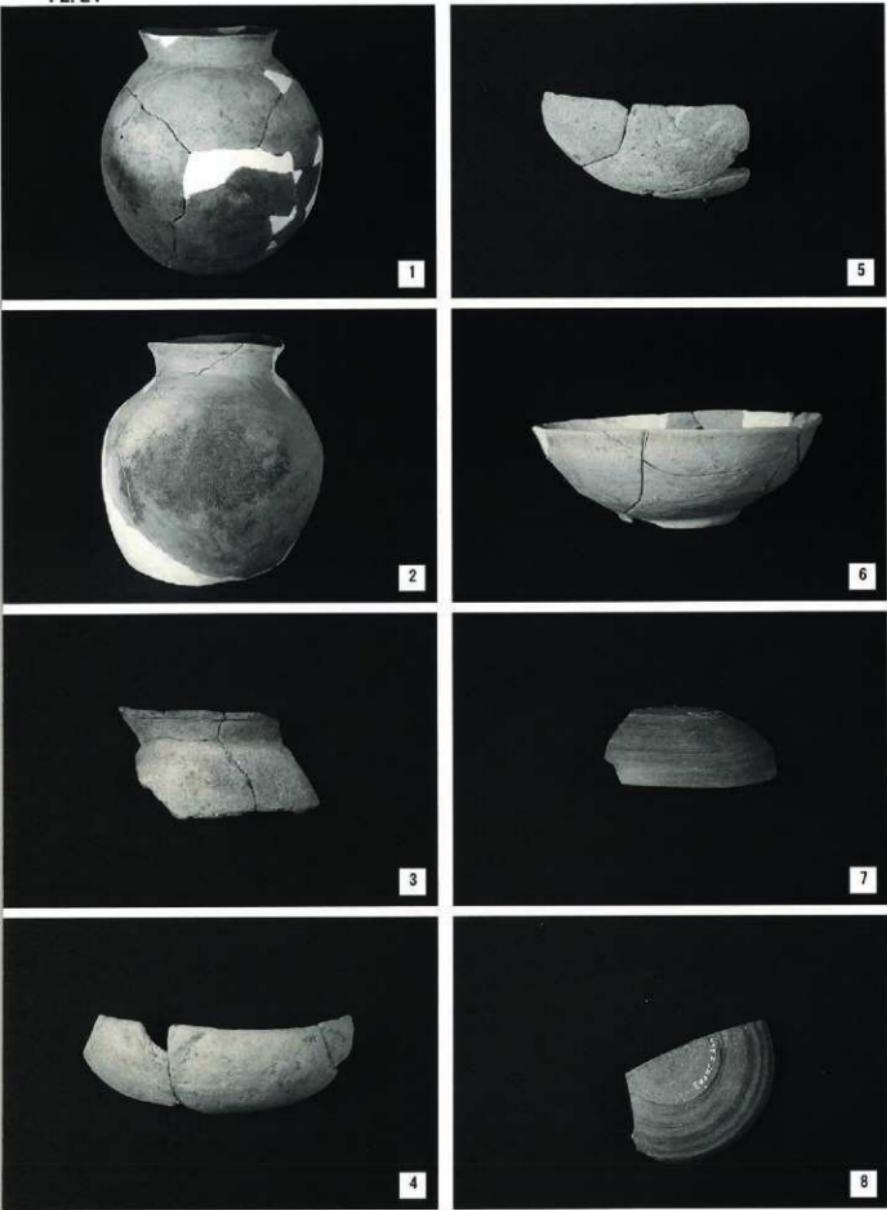
3



4

1 SK-223 —北より—
2 SK-224 —北東より—
3 SE-225 —南より—
4 SK-227 —南より

5 SK-228 —南より—
6 SE-229 —北より—



1 1 SE-201 出土
2 2 SE-201 出土
3 3 SE-201 出土
4 4 SE-201 出土

5 5 SE-201 出土
6 6 SK-202 出土
7 7 SH-203 出土
8 7 SH-203 出土



1



5



2



6



3



7



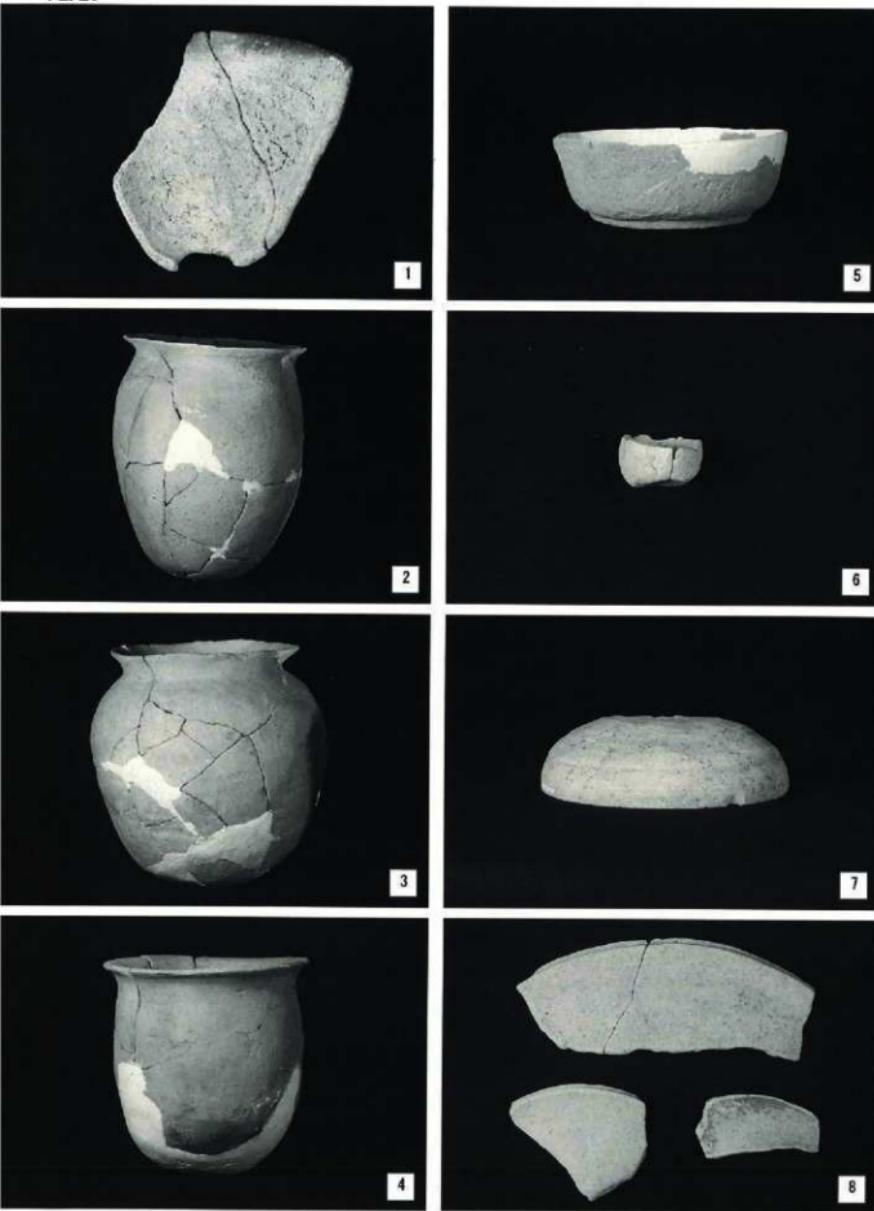
4



8

- 1 8 SH-203 出土
2 9 SK-207 出土
3 10 SK-207 出土
4 11 SK-209 出土

- 5 12 SK-210 出土
6 16 SK-212 出土
7 17 SK-212 出土
8 18 SK-212 出土



1 18 SK-212 出土

2 19 SH-213 出土

3 20 SH-213 出土

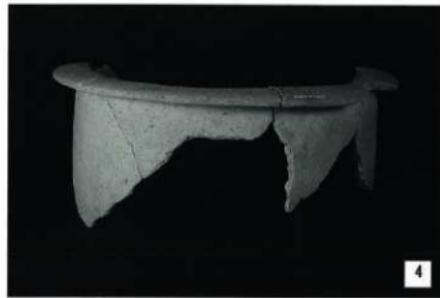
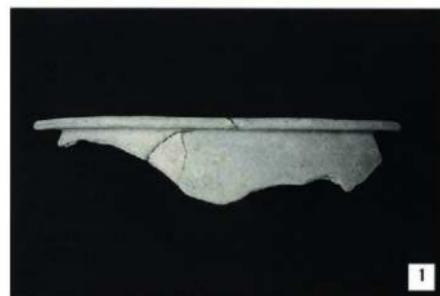
4 21 SH-213 出土

5 22 SH-213 出土

6 23 SH-213 出土

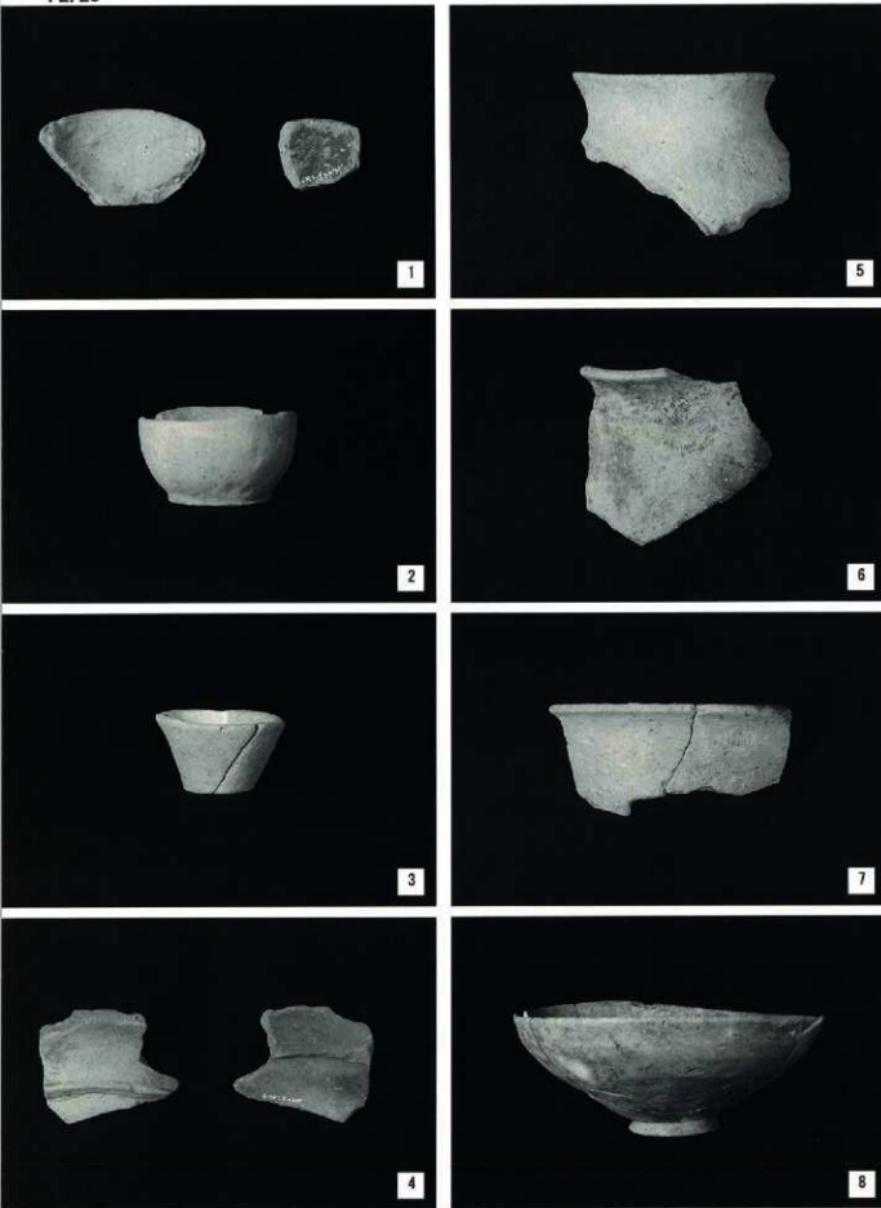
7 24 SK-214 出土

8 25·26·27 SK-215 出土



1 28 SK-215 出土
2 29 SK-215 出土
3 30 SK-215 出土
4 31 SK-215 出土

5 32 SK-215 出土
6 32 SK-215 出土
7 33 SK-215 出土
8 34-35 SK-215 出土



1 35 SK-215 出土
2 36 SK-215 出土
3 37 SK-215 出土
4 38 SK-215 出土

5 39 SH-221 出土
6 40 SH-221 出土
7 41 SK-221 出土
8 44 SE-225 出土



1



5



2



6



3



7



4



8

1 45 SE-225 出土
2 46 SE-225 出土
3 46 SE-225 出土
4 46 SE-225 出土

5 47 SE-225 出土
6 47 SE-225 出土
7 47 SE-225 出土
8 48 SK-227 出土



1



2



3



4



5



6



7



8

1 49 SK-227 出土
2 50 SK-227 出土
3 51 SK-227 出土
4 54 SK-227 出土

5 54 SK-227 出土
6 55 SK-227 出土
7 55 SK-227 出土
8 56 SE-229 出土



5



2



6



3



7



4

1 60 SK-202 出土
2 61 SE-210 出土
3 62 SH-213 出土
4 62 SH-213 出土

5 64 SK-223 出土
6 65 SK-227 出土
7 66 SE-229 出土

報告書抄録

ふりがな	にしまえむたいせき I							
書名	西前牟田遺跡 I							
副書名	平成 19・20 年度県道神崎北茂安線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	上峰町文化財報告書							
シリーズ番号	第 31 集							
編著者名	原田 大介							
編集機関	上峰町教育委員会							
所在地	佐賀県三養基郡上峰町坊所 319-4 上峰町民センター内 Tel 0952-52-3833/Fax 0952-52-3888							
発行年月日	2009 年 3 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因	
西前牟田遺跡 1 区	佐賀県三養基郡 上峰町 大字前牟田 字北畠	市町村 41345	遺跡番号 2028	北緯 33°18'43"	東経 130°24'51"	2007. 5.21 2007. 7.27	500 m ²	平成 19 年度一般県道 神崎北茂安線地方道路 交付金工事
西前牟田遺跡 2 区	佐賀県三養基郡 上峰町 大字前牟田 字四削八坂、祇園町			33°18'42"	130°24'46"	2008. 4.11 2008. 5.17	300 m ²	平成 20 年度一般県道 神崎北茂安線地方道路 交付金工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西前牟田遺跡 1 区	集落跡	奈良時代 中世	掘立柱建物址 井戸跡 溝跡 土壙	3 棟 4 基 2 条 13 基	弥生式土器 土師器・須恵器 中世土器・舶載陶磁器 石製品 鉄製品			
西前牟田遺跡 2 区	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世	竪穴式住居址 掘立柱建物址 井戸跡 土壙	4 軒 4 棟 5 基 21 基	弥生式土器 土師器・須恵器 中世土器・舶載陶磁器 石製品 鉄製品			

上峰町文化財報告書第 31 集

西前牟田遺跡 I

平成 21 年 3 月 10 日 印 刷
平成 21 年 3 月 24 日 発 行

編 集 上峰町教育委員会
発 行 佐賀県三養基郡上峰町坊所 319-4

印 刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町上和泉 1848-20

